隨筆

我衣

上

特別
15
1915

15
1915

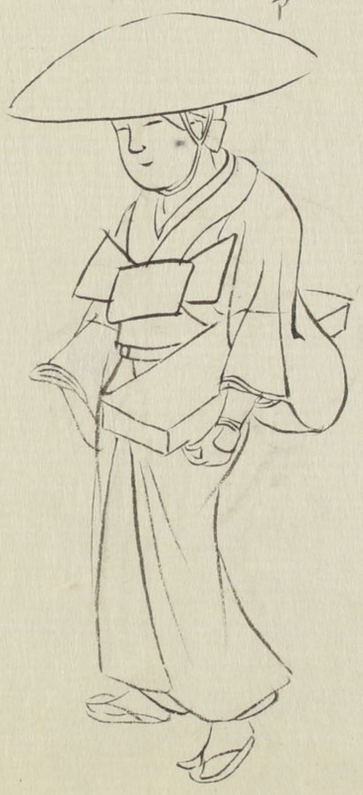
○牛王賣の比丘尼 元祿野牛王宝印を賣に出る比丘尼
小文庫扶内へ入るを見て
米を貰ふ家をせる又猫よ歓進ひさく我はろせ
扨も歌を唄ふせしふを見又こゝに死むさふらを
いと時ふう賣女のさしをつふふせう天和の比ふ世上
遊女をつふふるにふりかゝ
移ましふも元来修形なれそ衣服ふ木綿を着しそう
○天和貞享の比ふ茨城木綿ふ布子袖ふ有
ふるへつふ外ふ笠ふ立ふ文庫を持せふう腰よさし
ふる

資筠舎藏

○元録の比より黒松多く成ゆえ
を知らざるまでも甚あり
○宝永より小笠原抔を植そめ
より中宿ありて是より朝おそく
七ツ限りより宿へ帰る是の間往
出るまのし　和泉町小側裏ニ
中宿あり　玄治法印と云儀者
玄治店と云又ハ宮町古町通り
是所あり　正徳比ハ茅場丁組屋
京保九年小濱民部屋鋪抔
申宿より　沙汰後編風俗ハなの
黒縮緬の投頭巾を着たる長
くさけしうゝぬ有れあり是真比
も中宿あり　おとゝし　橋向より出る安宅丸の跡
形ち橋向より出る安宅丸の跡
兵庫より下品あり　四ツ谷の早稲
小笠原の門番武家寄合迄番
茅場丁組多白ゝし　是なり
小の方鳥居舟ハ度上り多なの
八官丁より心中業ハ公遠くより
申宿より沙汰後編風俗ハなの
黒縮緬の投頭巾を着たる長
くさけしうゝぬ有れあり是真比
も中宿あり　おとゝし　橋向より出る安宅丸の跡
形ち橋向より出る安宅丸の跡
兵庫より下品あり　四ツ谷の早稲
小笠原の門番武家寄合迄番
茅場丁組多白ゝし　是なり
小の方鳥居舟ハ度上り多なの
八官丁より心中業ハ公遠くより

浅キ頭巾ヲ細カニ折リ畳ミテ止ムルモ

京子保のころ頭巾黒く細折りかむる女のタヅを学ぶ月代をそれば長くなれば折りたゝみ〳〵もち上ケ折り目を宝永正徳のころ〳〵黒巾ふかうかぶりしぞも是おど長くいや

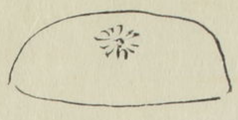


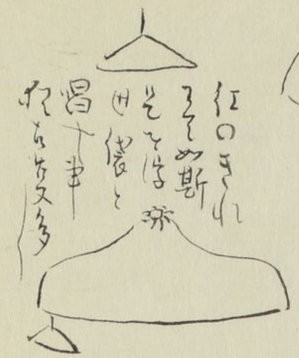
古来かくのごとし百巴

頭巾も古来浅キ浅キ巾ヲ用ヒ冬ニコロナトモツケタリ元禄ノコロヨリ長クスル

夫ゟ中町ゟ南傳止ゟ延京二年ま弐田の町ゟ客を留ゟと云けるみ何ま行やらん傳馬ありまゝ延京の比ゟ傳止を設うそのことにゟう

黒
中宿三六黒
チリメン


加賀
ともワタ入
クケともも
サラシ木メン


紅のきれ
そでは弥
四倍と
揚下帯
おそ多

古来上便ニ之ヲ称ヨリ加
賀ニ宝永ヨリ針金
ブナノ加賀也

延享ノ比ハ比丘尼中宿トメラレテ往来セサレト
モ延享五年ヨリソロソト前ニノコトクニナ
リタリ其コロ女房後キ小仮中形ハヤル比丘尼
モ中形ノヒトヘモノヲ着ス寛延ヨリ木
綿ヌイヅリブニ小クツケテ着ス
着スル物也 比丘尼ヲ是ヨキタリ比丘尼紋有ヲ

比丘尼

○天明三ノ比ヨリ
大物ノ俗ニ四五寸
足ヲ高クシテ
風俗大ニ下リテ
ヤヲリ切ニセヌ
カヅキヲ後ニ
ヲ向キ前ヲ
簪ヲ挿リ
テ居リ更ヲ
後ノ勇ヲリ

土ニ糸ニテ
トメタリ

セッタ切
マワシタ
マコヲヒシ
カヨウナ

○宝永ヨリ
享保ヨリ
廃キ平
△享保ニ

ムナ高ク
幅ハヤマリ
廣クナル
腰巻ヲ
ヲ向キ平クケ也但結ヒ下ケニハセズ
ヲ元文ニ至テ是ヲ

○浅草堀田原ノ北ニ三嶌明神ノ社アリ門前ヲ三嶌
長屋ト云フ門口ヲ入ル事ハ大抵ニアリタル
ヤウナル比丘尼アリ

足駄の歯如此然まゝ高下を為るもの也 漆を塗いほうでも

風俗をとゝのへ往来を改め 寛保御停止の節を申し下され 此丘尼古来のめく勤進ゐ出る衆まで

此丘尼雪踏よう履のきびとのかゝとやうふさりより平人に不用之文未あまりやう

丘尼雪踏 大家の足駄の金子首よう仲間へ 漸ゐ一つぐらゐ 今時なり

○丈比丘尼の容形い眉を並墨白く磨き紅を薄白ふ を化粧用代を申うりまして忌中の男女月代のごとく異 辨るよう面形似る比丘尼あるよう 中村源右衛門と云女形役者あり 源右衛門比丘尼と号名高き比丘尼なり

○又宝永の頃同宿よう小雀とて又をへ出比丘尼あり の裏よう歩あるよう勿論宝永の比時 きをふり乱れ自由時分の比時ありるに出来 快なゆへ自由ともや止のごとくなりる因居の老 不御百出さまも)事味有るに老人俊寛ゟ比丘尼

朝くつき奉世るよし厠へ行るよし一ト止ハ後露を右て
右なる主へきやるを対なよしみ雇ト云くき
筆をとくして火消の科よ落火衆よりなりる卵の表
かてもなきと不守時ハ右ニ文出ゑる時法度
不守智よて大罪小科もてるよ前ニるる往還並門外
くつへきやるは停止よてありる可慎ニて

二

○ 吳服店　大蔵院様御代兼而願
雄岩上人開基ニ新意の仏深川へ所替ニ仰付ニ
ニるよて正月廿七日ニよてとむと焼
吳服店同村の庫裏道濱ニ而焼ニ

三

○ 深川雲光院法善寺事松言寺ニ仰付ニよて誓願寺
寺ニ成明暦大事以後の事ニ

四

○ 新戸物店　天和ニ正徳まて
住吉屋清九郎　白子屋市郎兵衛　辻伏見
花澤清左ニ　永沢清左ニ　石橋住吉屋
坂本成ニ屋　紙ニ屋　伏見屋吉ニ屋
ニ高ニ屋

○ 茅場町表通小石橋ニ茶ニ
久ニ屋ニ町ニ住ニ里屋日本橋ニ

伊勢里屋常盤橋より仕おや仔ろ和狭屋市兵衛
○京保申次ぐ神田白銀丁
なを出しぐ夫ぐろ
紅粉白粉町にて昔ハ南京焼唐物を渡り物にて売ろ
高麗やき南京やき渡り物一おい高買せて買座ろ
引越して渡り物屋唐ものをこゝろ
○五
寛永元甲子歳三座ラシセウハサシヲ夫ぐろ古手
後よ市村行ぐ元芝居好ろ山村ぎま元孫兵衛
ぢ和おの芝居好ぐ上ぐろ

佐渡七ぎま寛セツキヤウ武蔵掾ぎまつうキ孫三郎セツキヤウ
上ぐろ元孫和泉ぢ夫大サツニ
云佐皆ぐ元孫和泉ぢ夫大サツニ元孫永栄サツて外記寛ロ
義ぢ夫節門まぢ多ろ来
○六
元文ハぐ宮古路豊後ぐ
○七
南京芝居天和上ぐて
○八
芝居衣裳ハ寛永の比猿若ぐ金入縞ぐ縫縮緬ハ
紗ぐ夫敷ぐ織無のハ羊夫金滅金綾打ぐもぐ
立ハ山ミストテスメレミ山或野ぢ浪四家の紋ナト書テ
其景色を云ぎまぐ正徳京保ぐ至テ中村伝七ト云

化者御詰 道具三十窓を始

○九 ○正徳四年綿衣装束御停

○寛文の比水戸侯より助之丞野良帰り下りて旭きにタイ
憫まをうもやうを先ず前髪かつうをな紅の地
おて鉢巻をきてうたひ元禄の比荻野流こゝえて
京下りの野郎サカリ憫子を始ゝ是を澤之丞憫と
ゐ又沒者物ヲ紅うて深ゐコト天和年中市川古
国十郎めくらを元禄の比古国十郎元字金ニテ給
金五百両ニ定ゐ高給金の始也ゐ後安徳年中
芳沢あやめと云女形就金千両ニて下りしより高

後老名海老蔵と云是千両の上へ給金取上ゐ三昧後
拍延なり

○元禄の比より裏新ゐ云ハ紙屋の干場ゐ云ハ
人家多あり享保年中より至ゐ菜屋野郎屋ゐ
○松寛永の年より始て役者の法名ハ浅老書集メ
而持ゐ寺村ゟ元文の比
字左衛ゐと改

○十 享保ゐ里年春市川団十郎
して世ゐ後他の芝居へ勤ゐ勤ニ郎後見して永て
可勤給金千両の極毎年六月中休セゐと極めゐ

十一 今ハ是ヲ定メ候、昔ノ芝居ト云ハ（ママ）
○江戸ヨリ云上海狸元禄年中宇度芝居ノ向ヘ
操芝居出ヨウ芸ヲ元和ノ頃ヨリ古キ寺ヨリ又言葉ヲ保年中
ヨリ門前ヨリ外ヘ出ル仕ヨウモ古キ寺ヨリ出ル
河東ト云ハ上海狸出ヨウ寺ヨリ出ル芸ヲ九
品川町出ヨリ云上海狸出ヨウ寺ヨリ出ル芸ヲ
奥田ヨリ勧ル町人ヨリ河東ト雖名ヲ本名ヲ命又名
字ヲ加ヘ云ヒ紋ヲ九小挽ニツ巴是ヲ略ス芸ヲ一仇
ノ狙ヒ元文ノ頃死ス寺ハ筑地本願寺地中ヨリ墓有リ
十二 貞享ノ頃手品フシトテアリ
○

十三 者ノヨフ
○寛永ノ頃小山次郎三郎ト云ル人形ツカイ有擔ヲ守ヲヨノ
芝居ヘ上テ年久シクヨリ芝居ヲ志ス
十四 貞享ヨリ上海狸ト云事ハ
○大ヨソ寺ヨリ後犯前ヨリ出ル依テ犯前上海狸ヲハ
多ク文ルヨリ
十五 天和二年安宅丸出来長サ二十三尋十二船玉東殿山南光
○坊大山ハ大院西漕勧請浦船ヘ垣回施ヨル解ヲ
十六 享保七寅四月廿八日弾左衛門長吏（長吏トハ下ノ賤民ヲ云）車善七及ヒ
○支配ニ入テソレヨリ後サン切ヲ（ママ）ヨリ始ル（ママ）

十七 ○路大明神 雷子谷鬼子母神境内右の方にあるよし

疱瘡の守り神心得おくよし有り

十八 ○天和年中菓子店の看板より仙臺箱と大原流の

古来ハ饅頭ニモ一ノ級先ニ来ル由ヲ出シタリアラムマシト言ヘリ表シタリ元禄ヨリヤミタリ

書くよう俗よく道明寺と書くよう元禄の頃より為ニ文字を画うきに文字を外ひ

十九 ○精と共結構を外ふ 仙臺箱と云判を押す重言ふ

加此モ有り

饅頭ハ蜀ノ諸葛孔明初て作ル地漿ハ林和靖ノ未ヘ出シとて火を燈して霄祭をなと

（但禁中ヨリ拝領の姓ヲ賜フ）

廿 ○祭禮の出シハ未出シ以前ハ

廿一 ○日神樂を送りよ闇をうち始め寛永以ても

なるよ重て不用行燈ヲ依くを形を表シ今よ至て胡粉

ぬて塗やうにいなりそ

廿二 ○やまいもよ物を他年中追有之を始め寛永以ても

有るよや大きやうニ染るハ元禄の頃より物ゝ享保

年よりハ御停止屋タイトニ云ハ一間九尺程小床を作り

手まりかうもを其内よ人形を二ツ或ハ三ツ据て

据よ幕を張り幕の内よ鐘太鼓笛ホの鳴物をかく

をや出牛車よてこなり後よは二間よ三間程の大家

屋を出す牛ニ疋或ハ三疋ニ而我うちよ大形よそ来ろう

町人衣服の事 貴賤上下の差別なく惣じて布木綿の外着ることを禁ず 但し冬は上田帛つむぎ或は絹紬の太織などを着ることを許す

一 奢侈を禁ずる事 是時節柄に不相応なる美麗を尽し或は温和を世上の善しとなすが如き奢侈を禁ず 今日は百物の利を得ること先一日の賤しき者も高きを厭て価の安きを貪る 又翌日高き物も価の貴きを厭わず是に依て人々三ヶ日五ヶ日の買物四五ヶ所毎日うきうき買求若油断して順礼などを困る依て高利小賣をそあり 其ゆへ物もの一賣に有人の心さまざまなり 価を高くするを喜ぶ人十が如くなる故高人法職人を雇て物数多くうることを得ざる事 我ハ欲ずして売利を得ん事 ますます増て元禄已来の徒との差異なる世間を見る者もまた 身上ハ分限不相応なる者多く 暮しまたるもの多し 気強く仁心あるもの少く 利欲のすく智のあるもの金銀をも多く温和なる世上をそこなふ人ハ日々衰ふなる世上ハ分上暮しよくなるべし 先ら(も)法のそこなみを

強盗の人罪科者も多し是に依て元文の比刑罪の義
一同極し其大罪は小科に減し小科は死を免さる此時
にまで敲ゆるしとて刑鞭の法と始る其なる死罪の者
刑鞭にて免さるゝを心得盗賊の数多し是こそ仁と
と云べし昔し元来をゆるうせしかしらる故に元仁を施さるゝ
〇二十三 末ありて仁政つきぬ元不仁にして來りて仁を行ふに依て之
寛永より貞享迄五六十年の間の人正路にして奢も
なく又むさぼる心もなし元禄よりまた徳にまかせて三十年
の間の人正路なしも奢る心多く依てむさぼる事も多し
〇享保よりこのかた人心むさぼりをえとし仁に似て不仁倹に似
て奢る此時に至て正路の人皆て乏しく大名といへとも國
主以下は下卑を専一とせる事故に世の中末に成しるか
〇二十四 元禄宝永の比まて町の繁栄は盛は極栄の時と成は
竜宮界の如しと云へり諸国珍味先ず池を最上と
有此異香白ひ家ゝに満数の遊妓伽陵の声と
成りて人は遊客は他人百金を得は中分は我は千金と
ついやしるると多くは自分を世界のさほと思ふ
保よりは他人十金をつかいなし家は五重とはい至して
飯りるまと世智弁をもとと心得者の元禄の人は思ひ
重銀捨る為に不捨は心なくとて地んとを入るのは何にと

おそやれう笑へり又六の妻人のこゝろの悪何なるへきを
入るゝに還るべき人よ笑ふべきを種と思ふ人こゝろ
程の何そもの一言をそゝるゝは不見るは不如

二五
○道明寺の河内の國よりある寺へ参りて飯をそゝるも
といふ事いふ道賓の天満宮の伯母覚書尼は道明寺より住

二六
○傾城傾國（陸奥）唐土にいふ美人のことをいふ日本にて賣女の
事をいふ誤り　賣女を唐土にては妓女と云　上﨟と
諸侯の召仕女ろう賣女郎と書へし
○賣女の渡世のさまよ美目よき女を買取て白粉紅粉を
ぬりて色を増し淫蕩と
媚て人をあざむき香具を常
衣気を去り法人を落し穴へ入一生をこゝなさせ或ハ
命をも損ふる不仁なる家職ゆへ世の人別人にて交う
ふ是を放ちこゝろ孝ある忠信仁義廉智の八つに放し
ざるゆへと唐人ハ戒るとぞ

○鳥獣ノ一片ノ餌ヲ耳シ鈎ノ有事ヲシカラス終ニ命ヲ失フ
鳥獣ヲ落シ穽ニ入レ鳥ヲ黏ニテヤラメトルカ如シ
傾城賣女ニ近付者ノ七損
主人ノ機嫌ヲリコノウ　身上ラソコノウ
命ラソコノウ　邪智ヲ増シ正智ラソコノウ

正直ニソコノウ　人ヲソコノウ

右のうち命をあやまる事品々あり

○酒深く湎り夜なへ行とき酔狂人のあやまち又ハ物取返落ち
なとに逢て死するものあり　心ゆるして死する者有之ハ皆
大岡忠知ル対ニ名目也　ミな存よりて近年おしんの中と唱ふる妾ハなど居り歩行
相対死ト云　酒食を過し或ハ淫毒或ハ腎虚なとして死する

○往来ある竜てゝ夜深く湎る物かる竜うき大くハ雨者ニ
是ら為ニ死するものそあり　船そ往来するハ怪敷

○元文五申年御濱沖廣ニ飼石の白象中野と云村ニ
死おゐ領ゝ前ゝ象飼料御物入多ゆへ倫約ニ有
之ニ定の為ハ於生ゐき由ニ伊豫ニ有之中野名主彦右衛門
著書ノコトナリユルキヲ洞トイフ　十六疋ニつゝよ壱ヶ月ニ壱疋ゝ死ニ
前ゝ大象となり三ヶ年ニ二疋ゝ死ニ後雨成ニ手ニ死ニ
ゐき由ニ三ヶ年ニ二疋ゝ死ニ長ヶ四間ほゝ大なる
右ゝ象の動かし御濱ゝ御上ゝ着ニ海上ゝ
飼料を減し候ニ依ニ象ゝ飼ゐ悪ニ依ニ象ゝ飼ゐを悪ニて

差て救教せう倫言をもつて不用〳〵と云こと誠なるべく
理非を正さず矢鱈へ（余志ト云ヘル如シ）多の糞い斗の糞のごとく
生ずるごとくス故ニ洞ト云瘡疹の薬として賞ざる故に欲なるべし

○寛保の比将軍吉宗公御ニ男従二位右衛門督（徂来先生）唐尺の本寸
近臣ニ語テ曰元文の比銭生ず右衛門督尺の本寸
今時の御尺唐尺ハ関元通宝経り八分十銭をもて
一尺ト定ろ依テ元関元通宝を集るに至て大中
小の不同あり何レを本寸とすべきや迷ふ徂来申なる
を聞て曰過不及なくして中ろの物を一寸とすべし

吉宗公是を本とせう宗武公是を不審していわく
文玄宗御製ありし役人ニ命じ不足ハ今製ぜん
小銭小銭を本として大銭を出来るべき沙汰
て大銭を本として小銭を出すべきよし沙汰
ニやおすとあるのい大海を用ゆべきものとを仰
ある近侍ニ我かめきし小良通ともうかと下情ハ
通ずる事不能して皆感いまといへり

○此関元銭ハ玄宗の代ニ鋳ろ文字ハ玄宗の筆を用と
いへり異説あるべし裏の字に楊貴妃の形を押
しゃるゆえ今ハ用の形裏よ有ものあり別説

○寛保元酉ノ三月ちとせ九月江戸大坂堺町
勘三郎芝居の向ふてからくり芳子狂言今更之
表の方左右よ竹二本柱額を正面よ懸ル

拠春駅めり文字形込
絆でうを入ル
偬偬師 多とれてゐるう人形多左を
をらうとをもちかれた偬ニ
偬ニして容をつふ

黄なよも狂言往吉おとり

○カラクリ三才計ノ子供人形指人ヲカフリテ大指ヲ打テ歳ヲ

云フ小使ヲ放ス 立キ計ノ子共人形ニ味線ヲ弾ク大鼓
小鼓ヲ打 狂言ニ条ノふ加鉦四方鼓ノ人形揚ヲ
射るからくり 狂言仕物更ニクイライシノ人形ヤラ
カラクリ舟舞あるよふなる 狂言嵐ノ陰ニ道行寺
火ヲヲノツカラ灯ヲスカラクリ 狂言大塔宮ホノカラク
り戦闘ノカラクリ右 黄ハ残若那集ル初日ノ
三日ノ間ハよう人多キなホ戸ヲ閉テ不入
○寛保元酉年世上ニ雑説ヲ聞ク又ハ年ズク沙汰シテ渇
金ヲ入ル事ヲ又ゴホウラアガレト云言葉ヲ踊ヨリ停止

○享保七寅年三月廿日裏雛七寸以下ニ究ル事仕ル
大雛ハ勿論ニて貴物取上ニ成ル事ニ候間ニ付
此ニ記ス

○寛保二戌年秋　時ニ
真菜瓜　六月節ヨリ
初茸　八月節ヨリ
鮭　八月節ヨリ
竹ノ子　四月節ヨリ

有増如斯　寛数節前ニ
初出ヲ取ラセ寛保二戌年
有度ニ候ヘ共神田ニ
諸色前ニ縁数方ニ
の如ク座十間ニ
右十間ニ座ニて
多座ニ候ヘ共
室ニ二十間ニ
後ニ出ル事ニ

○寛保二戌年七月難波瑞竜寺池中ニ一茎二連の花咲く

後考て信州大水出四ヶ五國の騒動となる全ク地中水
氣盛ンなる故ニ此ノ如ク異形生スト云ヘ

○享和元酉年も深川猿江ノ寺に一茎二蓮の花開名物
群集セリ又文政三辰年大水なりし地中の水氣上へ
異形の水物吹出ル支不審然ハ餘ノ水物も異首一ツ
も天地の氣候又理ノ外なる変ハ押て云ヘ
寛保二癸亥秋雨大名屋敷留主居又ハ用人
重臣ヲ備前ニ後露顕して右之役人切腹或遠島
又落ハ有し或ハ死罪ニ至ル者ニこの法の仲ル十人
余ハ皆御咎メ無之用事御止ニ仰付ル用事某ニ
ニ年程ノ内方流行して何ニ
而も食ニ有之時ハ物入多ニ有或ハ薬食或ハ食原
芝居ニて留守居金ニて情取右
當時ハ無之ニ
皇輔庵の時ハ焼物ニ名付
二ツ或ハ三ツ現ニ予ニおゐて
右度ニ及ヒ
ニ出ル

○其ノ節の風俗ハ先ツ純朴
ニ而ニ我ニ路

三十六○三十七○

のめくらふ宝物として目禮となして通る先の人にぬかをぬ
かしむもあまり無るけたなる事也

寛保三甲子二月改元延享と元年

當年甲子ニ付　将軍吉宗公六十一筭本掛ニて御染筆
筆御自大黒ノ画御書遊御自彫て給ニ而近侍給
其秋右ニ大黒像高田穴八幡ノ別當ヘ三千枚賜ラテ
諸人ニ施ニ給ヘ候ハヨ冥加殊十二銅ツヽ取とり寺社奉行
所より冥加殊の義何にとり取申候との云付有之の
御咎ニ而後ハ止なり二而康ニ千手観音の像も十二銅ツヽニ
て施しけり是も止ニ成る也

呂水案ニ今世ニ小像ノ大黒アリ竪三寸斗横一寸五分斗ノ大黒ノ像右ノ方綫ノ端ニ延享元

三十八○

甲子年トアリ云カ又是ヨリ吉宗公ノ御彫ニ遊ハサル所ノ大黒ナリト幼少ノ時承ル

寛保二ノ春ノ比より果庵寺の方丈而化ニ僧對して云演ス
事有り（呂水案ニ方丈ハ騎冥公上人之後京ノ智恩院ニ移轉ス）所化衆の負邪不幸有之時
平亡者の掛衣を才上に取上ケ法名書を付本堂にして
定に依て所化僧お立かうして公事ニ及負邪を所化衆と
一所になり増上寺ヘ訴訟ス然しとも方丈と所化ノ事なれ
ハ不叶所化五十八人（五十八人ハ此後寮ノ坊主也）同菴ヒ子ニ七十人ハ背く寺
を追出されり二而後浄土之となりて五十八人ハ江戸ノ改易に築り
同菴の僧ハ帰りあるへし依て果庵寺大ニ住立ける増上寺
なる僧を借て庵を守らせ然しとも負邪通宗ハ他宗とせる

越へ渡の事をいて承を越度と云ヵ又神通る
云ハ越後ハ北の湯なれハ云ハ俗よる越路の嵐と云心ハ非代ハ
少をいて陰の極りと云承を得ハ陽の生ると云ハ越へ通ハ也
越度とハ物語ある人有りの陰の生ると云ハ越へ通ハ也
延享元丙子年六月始而国橋始て掛直ル（当国橋ハ百廿年ぬけてゐる）
二壬戌八月一日ニ百ヲ七日迄大雨ニて西国橋落ル故ニ大ハ
の字ニ新大橋西橋臺ヨリ十五六間先ニ大間七間程の
ハ落ル事ニ而是ニ大九ヵ三ヶ所ニ而ハ落ル事ニ而是ニ大橋
ハ枕ニして通ス当国橋掛直ニて成就ニて後再
作有六軒町の名主町人ヨリ申請一人ニ付ニ取ル橋普請

吳服寺ニ而ハ二度方丈ニ而ハ
通ル者ニしか共ニ而ハ
そるし通ニ而ハ
法式ニおゐて心ニ
待ニて法ハ
寂滅ニ十歳ニ
呂水ニ
を始ム郷多ヶ佐渡へ通ル
出雲ニ而ハ海上十八里
佐渡の國ニ
（前ノ方ハ
見ニ入ル）前ノ
ハ毛ニ而ハ
事ハ親と子との
方丈ニ
年ノ間なり
ハ出ル
ハ須佐湊
越後寺ニ泊

〳〵往来せし心　　新大橋の元祿の年　綱吉公

五十の序祭こ年伊毋堂桂景院様ほ彩こな掛さセらるこへ

○延享元甲子六月中旬ヨり七八月の比まて流行大こ風病流行〳〵延享元のことし七八百人

○おセの風流行ある

○同九月能勢亟四郎殿町時所人男女絡

以下と花枝の再篇有て

○同年豊化ヨ年新歩ヒ右年ヒ

依こ活業取こ古箱元元風寒こ

定有ことくへとも活損毛有こ支なき以役有徒の所人

九人ヒ賣上こ後伊勢丁成井若こ印小紙町梯

七屋等協丁冬本方ヒ南新堀ヒ小紙丁天野

屋敷中橋磯田何某両船町海保ヒ富田三谷元帝

役四丁方屋得ヒ富おん役おカ賣上ヶつつ為るめへ不みカとくへ

ヒ公役所成先こ一石ヒ年迄ヒはるつめヒ仕ヒ

線至何某事部役所史殿の仕遣ヒ依ヒ病未排時一石

一斗ヒ賣ヒ小下直こ賣こ為ヒ者こ為ヒ手続こなる依こ来

米多メこくへとも下直こ賣りのなく又こ為ヒ賣りのなく暫

米高賣お止こセり実ヒ又こ為事の有徒の五十六人

買上米ニ御年貢ノ内ヲ以テ御代ノ支ナキ様ニ
差支ナイ様ニ致シテ九斗五升三俵ニ成ル筈ノ処
売米ニ不及中後ニ十八人ノ買米ヲ町奉行ヨリ封ヲ
シテ売支ヲ不許ニ付テ後二千両ト上ノ町人ト
御用ノ儀ニ付名ヲ以テ書上ニ江戸表大坂ヨリ
探索ノ為ニ被遣候ニ付テ十月ノ末世間大ニ騒敷
静ニ成ル 十月十日右封ヲ切テ
（此ノ次ノ文ニ売出ス）
○十三 天下ノ御法度ヲ御使ヒ上ル節ハ上野御
宮保ヘ御申ヲ以テ吉宗公ヨリ御法事有リ
有章院様御代ニ文照院様御代ニ成テ上野ヘ

○十四 同九月公方吉宗公御隠居ニ成リ
家重公御本丸ニ入ル 吉宗公ヲ浜御殿ヘ御移リ
家重公ヲ奉称上様将軍宣下ノ後奉称公方ト云
有御撰金二億何百万両ト聞ニ及ヒ御三家御門並
普代法度ノ人御撰物ニ御加ヘ下サレシ事
ニ候ト申ス

○十五 延享二丑寅三月中旬得（トク）心（シン）ニ御出子年ニ来ル申迄ニ貸
借先ヲ通ス毎月銭弐百ヲ七ツ斗ヲ御出シ二季ニ銭弐
百ニ依ル七月切金ヲ御出シ十二月右ノ切金ヲ差極月ニ

○ 廿六 延一の巣ハ初冬斗為ル依テ俤方ハ不宜
誹諧ハ貞享ノ芭蕉大ニ流行ス門弟其風流雪ヲ
て少シ下品ナル俤ヲ依テ世上ニ流行
又ハ色墨流ト云ハ宗因ノ書ヲ尚ブ故ニ
沾徳沾洲青我一晶ノ流ヲ汲ム
又言葉ノ仕素人ノ
上手ヲ享保未ノ頃迄ヲ大名ト
町人百姓多ク教ハル又上ヲ有ル
ヨリ文上ヲ有ル愛ヲ為ノ巣洲
ヨリハ芝居者ヲ市川団十郎 海鳴屋家號名
岸坡柏庭ト云
海村家高上手ニ是ハ享保未ノ頃迄大名ホ

肉筆俤後ヲ為ル為ニ遊ヲ別ル上ヲ
ヲ大略有ル
○ 廿七
貞保ヨリ元徳ニ俤ノ
ヲ頭ヲ為テ有ヲ世ニ
注ヲ甲乙有テ出ル為ニ着ヲ
ル水ヲ入ヌルヲ為テ
前句ノ仕方 狩ル
△ なるぬことのなり
こちとハ及ぬ恋の
△ 白い花ヲもり
何某

なるふるる井戸のをおて貰ひそい　下水ラ定、ナ支ナヘシ
△　るるね支うる
　　岡なてて毎日入とキ　鍋湯ン
△　色をい事うおく　著掛ノ支ン
　　主なてるいの俗ようるうかうせ
　　逗ナ
△　私ふうう　解ふ紅毒の埴根こし
△　あうるる　たとん宿してひの衣
△　をやいこと　ちるう町うう矣の度

○児

先ふれの品を逗ナとうふ　番しくはけ次の逗ナの
正徒の逗ナ衣の逗ナよなそうく二公ナと各消不宜事
添付う前ふ始なまて法人の合意住安きれる逗ナの
類をう一句サ一句書ナ生ナ一句の内て何しの句か句
組て出てふてを前さ在海こ句をた当りのは金一両
をを料ナみる金をえへて思の法人欲ふ
けう亦取助へそのこを葉をを注まくる流ル了後ン
は逗なの句と忘ちうし出さ懐帯と各ナ差残の
句よ和亦ニ神を書一十
対しの面よ掛ふナ
十一十五なとく数斗をまく
ん巻を帳面ニ衣の一う二十そ

数字三ツ宛組合して一句となし右五句の内三ツを当れハ
一番之二句当るハ二揚とて謡をきらひ

和歌三神　廿一　廿六　三

ふふるに当るハ入揚ハかかる也
読人ハ上を打て幾度も後ハ棒引とて三六廿七と
句の中ニ棒を五本も十本も引出て十句の料を
差出金千両ともとるもあるなり　弐五車七車十車
とて

一 三 五 十一 廿一	五車 代句料
一 二 三 六 十五 廿一	七車 代句料
三 八 九 十一 十四 十七 十九 廿一	十車 百句料

三ツ当り天明比まて八大ニ流行せる白川侯の時分御停止厳しく刻禁止ニ成て今ハ是等ハ絶たり

右之通り附ハなりし町ニ印着てあり金かけの博奕になり
是ハ御停止御仕法なる事なり元来是ハ博奕の
頭取巧出しける物なるべし
文宝の同ハ一ノ裏六合テ七ツ二ノ裏五合テ七ツ三ノ裏四合テ
七ツ都合三七廿一なり一ヨリ六まて実あハせぬものあるに増テ
大一ハ何ニつねよし其上三句組合しても是ハ元来六十両ニも至るべし
あたりぬハ大なる事当るハ大ニよろこぶ遊之今日本橋其外御堂
札場ニも三笠の点ハ厳しく御法度のよし別御前ニ札出し
さらんなるべし
享保八年ニ此地口附と云ことを流行る是ハ点者ニなり題を

出さるゝ時ハまの字ハ字を書てたゝうとき
移ときハ痛ミ苦しむ故物塗道具を多く入おく
地口附ハ下繪を書上に其言葉を書てもとの
為附紙にかゝせもよし

梅花を
折て
かうべに
せせぐ

其後也阿古停止ニ
又寛保元年ノ冬ザノ付を添ル忘ず頭を出ス

是ハ今の物ハ消なり

赤ひもの
四角なもの
黒しぼの
くるゝもの
車てまりの
かなる品十種かを書ク行きるゝ毎ニ付きる影ニなる
料十よりて一番揃百文ニ売ル売ル時ハ赤紙
よ有ときへ
赤ひもの
黒ひもの
四角なもの
くるゝもの
釈の張りの黒ハ袖
ゆかなる物ハ付ハ
ゆゝもハ袋のハ見も
云事ハ時世のもの
ゆゑ

車てもあるものい　文七元統の人人の言ふ
三年流行後御停止となる
○言ふ私のごとき物い消の文字十一字よう言ふ七字四字となう
いう文政よりそく見たくみすそ一通よなるまでする若いはよふ
このごとく文政元年の公ものもう言ふ巻甲よ
上ふむへいり　俄の雨よりあも）
ふいき原へ俄見物ふ行ふ若う面よまでそ女郎屋へ行
うなよ帰りしこ
つぶー　衣紋よまう四方
おまい夫のお座へうと衣紋抜そ女房う指さこらへしへ

一種この切」上をのトカ下い四字よう言ふ
おそのとつ　万歳のハよ
おまい方うをして遠慮よまし一度なりまむい妻
殺ふ盗人なう
なてそ三百　箕河のふ
蓋いまつふんの異名ふあつて箕河へ行
なうまつふむを買ふてふ三百という
ようを同ごとう支なう
○牛
享保十年ヒモシリトふて流行る字モシリ牛モシリの
両説有ふいを不の俳諧なある人を私甲乙をふ

稽古は懐紙を書入之人七人ずつ入替ゆへ
先生を中一向を脇一句のみを又を脇して付る
今の脇之付へ

なまもこり　　ぶな丸なり
　　　　　　　　　漾
又おもてを見ましてうけて下さる文を別ゟ云廻
むまやのみ　カミスイ抗テイル　三田に町
　　　　紙　　漾
前まなの一

李もこり　　ぶな　身布　　肉有り拝有兎も有り
　　　　　　　　　好
ぶ兎もつり　　細ち小舟をあらんしまる
　　　　　　　　　楽瓦
家庭ともなまおあまでも暗ス　文字理ト書テ可ヘ

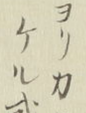
○廿一
文江戸宗蔵の姑ハ明暦二年丙申年卅四才にて
九月廿日と云年疫病を好へて焼死しをるしる
聖丁酉の大火ゟ御城ゟそこ焼失しう後九ヶゆき
ゟる宗蔵大ゟ洞法一うる右穴ゟを凡て世上ゟく
流ゟしる

ゟ九月下ゟ入ゟ古書の筆記しる人の母方ゟ祖父
ハト書ゟう東本願寺地中萬松寺に葬ゟと有り
九歳福篤右衛門妻ゟ浪人なりゟ云

寂宗佐信士　和泉屋
　　　　　　九月二日
六月廿日

○明暦あたり迄い女のコウガイが多く鬢の棒コウガイなり
寛文のころより笄を挿す人も有り髪い片曲ケ也
是い内室へ下女いコウカイ髪甲を用ひ
髪甲をはづし丸髷に結ふ
角ダテに結ふ

宝永マデ
ノモノ



カウガイサキ
如斯正徳ノ比
若キ女ヾカリ
ノ用ユ

高島田ノ元結ユエ
ムスビ上タリ
コレヲ用ユ

○宝永迄い結ひ髪とて逍遥是を専とて元ゾ上げ時
始る

長ク下ケル
下ニ出ス
タブナガシ

元文ヨリ百會ノ
トリ上テ結ブ目
ラツリ上リタ
ブモナシ

補
天和ヨリ傾城
ノ金髪ニテ立
髪ニ
當田下ニ髢
乃ヤウニ
いたす
風也

享保中ヨリ
ニテ中フシニ結ブ
左シタブ少シ短シ

○延宝貞享の比より遊女の髪ゆひを
そりて下るより元祿より結よう盛
迄い有合の領切にて色ムらり元祿より
白き晒を本綿をそりより其侭結
是風延享の比迄用ユ其好嗚
田に品こあり元祿迄髷長く多
きを良とす

又
〇勝山ト云風あり宝永の始二大咽より勝山髪ト云
若女形下り始髪を大髷に結くゝり是風ヲ
勝山ト云後立役に成勝山又五郎ト云勝山の流
別に有
〇又元禄比より吉原の遊女勝山始て大髷に結
ひ手此風流行ス

〇男女心の如きハ形ヲ顕ス然ヲ形ハ取ニ
心ヲ顕ヲ宜文比男伊達好ミ
もしくぶも雰気まの者ゆゑ
故ニ髪もゝふ結ひ
らで

内ニ仁心有りて和らぎあり宮子保まより髪ノ結ひ
様ぐさ〳〵ふしぎ〳〵ゆゑ
雰気まめつゝ仁心もなく人
形ニ顕ス是取りすき古文もなく
事和ラギ〳〵ス然ルニ邪見ニ
心何そや心のさるぐ故ゆり起ル宮保ノ比より
髪一仁のさるゆゑ時なるゝ

寛延ヨリ髪ノ短ニシテ横一出ス
片ワゲ尾ヲ上ル櫛カウガイ
大也銀ノカンザシ用ユケトニ
ナル故ニ見ユレトモ前ヨリハヤン
ト見エス

〇男女の髪持ノ変り故
〇上古ハ髪月代油或ハコキ元結ト云コトナシ老若共ニ
胡麻油ニテ〳〵梳テ元結ヲ結ヲ結ヲ結ヲ月代ハ剃ル

信長の時より専ら多くなりそれ
也別に傾あり 鍔も二間拇になる前は不残有髪也

寛永の比如斯

蝉折トテ ハヤル

上ルリ太夫
江戸半太夫ハナビシ
ハケ長クテカケト云
中ゾリ有宝永年

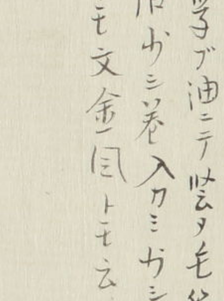
○元禄近御絵本ハ何も合せ髪也

○貞享のコロスキ油ニテスキ毛笛ヲ通シテ高髷ニ結中ゾリナシ ヘガミモナシ

寛文比黒糸ニテ髪ヲ結ユハヤル好色ナル者ニ有

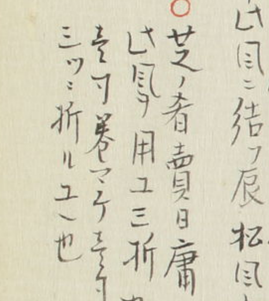
亨保未元文始マデ此風ハヤル入カシ也

元文元年ヨリ上方上ルリ太夫ノ髪ノ風ヲ学ブ油ニテ堅メ毛筋ハルメナシ元結ホシ巻入カシカシ入都古路風ト云文金風トモ云



針ニテ留ル

亨保ノ比辰巳八郎兵衛ツカイ出ス風ニ結ノ辰松風トテスハヤル



○芝ノ者曲見ヨリ庸取ナト正徳迄ハ風ヲ用ユ三折カシトヲ巻マケテ元結ヲ掛ケ先ヲ三ツニ折ルユヘ也

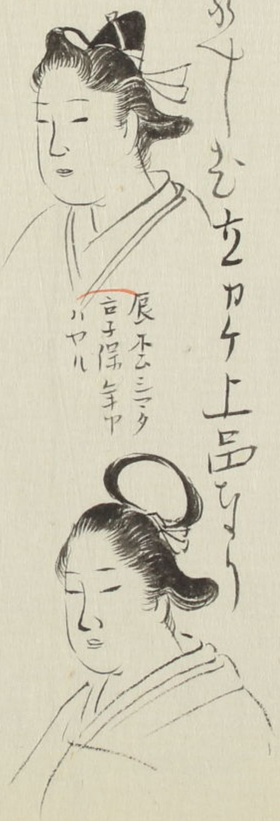
上ニ同巻ビン有

髪ノ根元ユルクシテ下ル

元禄ヨリ本ヤ風ヲツコシトヲ中ゾリ有

○右の外色々髪物数奇ヲ
致候也四主大名乃家中
不慶小家ノ陪臣籠本
町人百姓共若き族
女中も髪物好
解ル訳サゲ髪とも多也

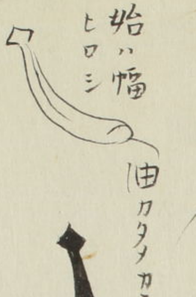
○此外袖ハ嶋田も多シ



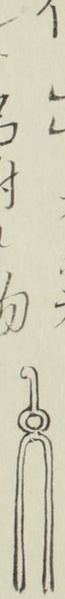
○勝山ハ吉原山下道順ノ
ヨせ文れが侍ひ初め〜

○此頃体すく同達風流の
ものこの

延享年中ハ風ハヤリタブヲナクシテ横ニビンヲ開カセマゲノナイサリ百會イタヽキ〜上テ結上リヲコレザルヲ本一トス

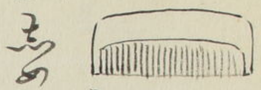


言子保ノ末ヨリ延享迄ハヤリビンカツラ古来ナシ宝永比ヨリ始ル



青桐宝永ヨリ後ニ出ル元文寛保ノ比ハ不未考
享保頃ヨリカンザシト名付ル物ニテ舞子金銀ニテ梅ノ枝ニ亀紙短冊ヲ付テサス往来スレハ音ノスルヤウニコシラヘ又ハ元年金銀ノ櫛笄カンザシ数ヲ御停止ニナリ後象牙ツノ〜ヲ始メ銀錫ホニテコシラヘサス賞処ヨリ御停止ニカマワズサスナリ

上古ツケノ



獅上品
也 長小ブ
り也

補

○天和貞享の比

かみさきもあまり
けずらず
ます手ふり
うしろひと
かたくる
ふさまでごうぐらよりしまり
まげうらのゆひやうも
のうしろゆひやうも

補

○天和の比ち
本田髷の
若衆の
傾城買
の風俗

補

寛永の比との女の
髪ゆひかたち
のやう
承応明暦
の比までかく
かくのごとくむすびて
うしろのつとあて
先ひだりかたへ
たをしかけたるなどのことや

○ 其後木ノ皮梛ヲ用ル明屬年中ニハ大名奥方ナドハ
鞆甲ヲ不用遊セトゾヘラル法ヲノ梛小窠ノ棒ニウワイ少テ
淋ル之ヲ称ノ如ク世上活達ニナリテ鞆甲モ又あまて
荷綿ナドヲモセ鞆甲モ上品下品ヲ分ツ価ノ高下ハ
アレトモ金弐両ヲ極品トス享保ノ頃鞆甲ノ上品
五両七両トナル依テ常体ノ女ハ不及力ホノ梛ヲ
ノ荷綿切金ヲ入ル而足ヲ入テ水ヲ
中ヨリ細工人ヨリ上ヲ出ヲ求テ水ヲ
斑ヲ入テ上鞆甲ノマヽヨリ高
ク梛等ニ上ヨリ似セテ

五十三
○正徳の比厚地の木綿流行様に金銀粉にてイツカ
ケヨミメリ長崎三へきより享保に至りて木綿大方廃りて
専ら結構縞有り元文年中家中の揃コウカへ流行
男女とも身の餝り着るは享保以来正に元禄より正徳迄
廿四年の間は世上繁栄の極なれとも民不着享保へ
来上御倹約有一に遊と云へとも下の者上古よりまし
者んに享保年中より倹約つよしといへとも米穀多く諸色
雑用下直成り朝夕のいとなみ心やすかりし故身を着り
ましりとえエ

五十四
○伽羅の油は古来有し寛永の末に芝神明前に谷忠兵衛と
云物花の露と云菜油を製して両郡のふき売に吉田屋清兵衛を
付る白き油へ　○大坂瓦屋橋の河本村某と云者に河内屋江
口き時元文必死と極へ首ヨリナシの者としてにも伽羅を胡麻
に油まて葉を髪に付けする　家康公も必死と極へる
を感じ続びて御履歴の事に三言証あるは古文諸書に少し
の者ひ有り是伽羅の油のはしめなるへし
井伊掃部頭内安藤長三郎木村某と云者を
寛文年中日本橋室町一丁目へ兵庫屋中村数馬伽羅の
油の見世を出し此三年程より糀町に谷宮内と云る女方油見世
を出し是油見世の元祖なるへし　尚小虎屋一元をは又せと後

…ものを武士は油と申ます吹
遠方より武者来て事欠ける用の席より油を求め来りし使者
拾貫匁二両入二両二朱の曲物五両入上油一両を代に
極上白き油代四匁
右之通之賃に甚貴て多之匂悪敷不直成る極
吟味し香具を入る梅花油絞の当春迄之実ゟ
斗中ゟ髪結床ゟ晒燈計の油をつかふ
十五両ゟ百二十両迄紙ゟ色の使ふ世上拾貫を有
皆ゟ包袋なる油も無おなし四両を五両ゟ価安十匁或ハ
弐百目ゟ十四両ゟ賃を取

○宝永ゟ油元結の元祖多ゟ出ゟ毎買人稀なるゆへ多ゟハ
○女の子供髪并寛文ゟ以前ゟ武士ゟ元結おゟ元結ゟ者ゟ
ゟり也一説ニハ武士ゟ元結ゟ後慶甲の高ゟ黒さ
束上ゟ末ゟ後ゟ元祖半中京都細立ゟて張ゟて角カク
上品ゟ後ゟ元祖半中京都細立ゟて張ゟて角カク
の内武ハ九内種ゟの紋を彫出ゟ慶甲の
形ゟ如ゟ梅の枝或ハ唐竹なゟ或
表ゟ一ゟやの名ゟを次ゟ重ゟゆへ髪下ゟて後ゟ
不用意ゟ係ゟ時ゟヒイトロ竹筆ゟ軸ゟ抜ゟて

五色の綿を入そう後よいにイトロを掛りてコウカイさし
又元文年中二味線の根緒よて
ケニシムスヒミテコウカイサス元結を糸て外ス
此如き物へコウカイと云又元結と糸て他の類よて

○貞享天和迄い雀の絵書の
ハ倍をつく女ハ不用老母なを用う元文の比い馬の骨
を雀の様よ拵価十銭位小賣ル田舎出の下女なを用ル
事此の雷式ハ作ニ銀箔を置ル弁も此時なり下前綿
掛弁の数享保ヨリ延保まて多ク仕出ス事也

言ふ和の如り十六七才の娘迄の女元結の上飾り編組の
物を巾を寸弁半尺八寸なと用ル
ものと又文化六七の比なる
○享保ハ九年の比掛弁一ツ三ツ掛放掛ケを好女ハ皆
品ゝを現金掛直ゝ一安賣十九ゝて用ルキヨリ取も
賣ル商人有様ゝの流行物を無ク一通品ゝ或ハ八十九ゝ一
通ゝ数多並ベ小刀を作ル事数将棊駒三味線ゝ
多ク製入鉄メ盃漆物類ゝ鏡剃刀人形墨等
のまゝの如き中ゝ右の賣ル事ゝも利ニ乗ル物ゝ何

○

小てこを売ゆへ見物の人多ク珍しきゆへ頭ん人多
弥繁昌しける
現金安売機直ゑの根元ハ元祿年中越後人究ま
ゑ呉服屋ハ本町ゟ神田ハツレの右へ依て越ノ町
本銀座の辺を仕入上物ゟ本町ゟ神田筋廿軒
弐百ゟ余の人男女ゟ衣裳献物ゟ事不絶郡内
と入ゑ多く仕入ゟ故ゟ越後へ

集ゟゆへ繁昌の様なれ共ゟ後ゟ
ゟ越後屋ゟて大繁昌ゟ
店ゟ出ゟる北本店通室町二十間ゟ
十四店の方西へ六七間ゟ
元文ゟ年東へ十間ゟ
富山ゟ店ゟ室ゟ現金掛
本日本橋ゟ十間ゟ
◇本町越後屋ゟ
南側寿ゟ室ゟ
ゟ中尾張町ゟ

元文元丙辰年の事なり扨大和屋処保二年の春本郷
住吉町十一番地に高保年中より四國町と改む
元文年中は此後再改何れも出ざるにて中絶なり
不及

○白木屋は古き呉服店にて利を得ること
甚世間を多く仕込て利を得ること
宝暦元年大丸普請等能も大丸の元おきまして
有しも借金多く免も角も引上ることかなふまじとて
の相妻子を捨て上方へ欠落を覚
時ゆゑ蛸蚯足の上より登り掛へ又登る事数合三度迄
是迄門を信仰する時きつて思事を拵又江戸へ立越

同屋向へ行き借金を云訳
なるべきと語る人有りそれより
其家主の娘の今は十余にて
屋店物語り
○扨大和屋は双物類は現金安売故直ち
こととて沽券は蔵前名護屋仁清
出入又二年の後本換町呉服
不日大高買大繁昌宝暦八年七月てうふ町へ
店を出す

○前こゝに酒井の別荘有て一樽壱の代物別荘を以一谷

二合ハ賣ヲ一貳ハ上酒ヲ價下ヲ書ヲ通シ
何ヲ買ヲ出ルヲ云ハヘモ知ラヌヲ云ヲ
ナレ家ヲ元文年號ヲ合ヲ何ヲ
大ニテ外ヲ格別下直ニ賣ヲ
時ヲ寢ル酒ヲ元直段ヲテ招ヲ
ヲ毎ヲ下ヲヲ賣ヲ一ヲ住ヲ
作リ酒屋ヲテ田舎ヲ嫁ノ豆腐一丁ヲ十四ハ加ルヲ
豆腐ヲツイ不賣ヲ毎ヲ
ヲハヘ豆モ元直段ヲテ味噌ヲ
明ケヲ肝要ヲ

あの賣ヲ男ヲ前ハ賣人中間小兵馬士ヲ
眉ヲ食ヲ多クシテツヲ
依ヲ肴菓ヲヲ求ニト田子入ヲ
ハ座ノ如ク有ル自ラ見世ヲ
三ヲ肉ノ体ヲ元ヲ無品ヲ
立ヲ三拝一通ヲテ求ヲ
ヲヲ仰ヲ箱本元ハ仮人中ヲ
ヲヲ事ヲ一ヲ
小川町ヲ谷青山本々ヲ
ヲテ積返ヲ何ノ酒ヲ

国立国会図書館

利をとるよう申渡す酒問屋ども金四百両ずつ
元金をもつても売酒問屋へ積送りに行百姓ども
事ゆゑ一向屋も前金を借
へきなどゝいふ訳にて持ゆき酒をい
豊後屋へ送りかし一両日の内には飲つくしてやう
解兼四五日後迄薄小売酒屋ども
くして売酒問屋へ不及
迎なりとや

○寛保三年中日本橋南二丁目西河岸角へ現金安売掛ル

○元文年中ゟ雲母摺扇日光物ハ現金安売見世出ル
黒骨扇双数拾本ゟ雲母摺扇日光物ハ現金安売見世出ル
ゟ書出し一ト通り外ハ不用ル

○延享二年三月ゟ越後屋ども安売掛
ゟ一ト通り外ハ不用ル

○寛保三年越後屋ども安売掛
出ル対ゟ二ト月ゟ移ル

○右薬の小売ハ表方ゟ線香入ニシテ売ル
ゟ四ツ有ゟ二ツ迄ハ不守ゟ安売札四ツ

の事ハ宝永ニ正徳ニ有ニ言ニ係ラ
二事ニ候ヘ共ニ宝永ハ宝永ニおいてハ
○宝永前ニ於ハ法色ニ至ル迄ニ貴人ニ
ニも思ニ用の無ニ成ニ候ニ付ニ
下ニ至ニ候ニ付ニ是ハ之後ニ
町人ニ於ニ金銀多キ事ニ
なく金銀ニ重ニ用ニ
ニ成ニ候ニ付ニ
ニと金銀ニ
志ニ

お俄ニ倹約ニ
ニ成ニ候ニ付ニ
胴地ニ居住ニ
居ニ安キ所ニ
をニセハ ニ
法ニ元ニ
大方御道中ニ
町人ニ
○正徳ニ

そこの所へも尊氏て帰るべし依て右の
入用物費を蓮葉高くと云へ蓮葉ハ盆おこり
費物とまい一束十銭ずつ銭小費ずつ年ハ半銭も
不等掘りへ入て仕舞ぬ享保ずいぶん世ハいなき事
小海ニ有ぬハ洞ハゆへ五ツ寺内の入用物も多くハ仕込ハ
立寺内物前ずつとこそ亦よ凡ハ
入合小売するなれハ元の用欲よくなれハ多くハ仕入ス
依て価年ずつ手当ものもの
天和貞享の町人ハ身ハ奢りをやめ高買ずつをせん
浪世ずるハ苦労ずる変ハ少し

○元禄ずつ町人奢ん為ニ金銀多ク利倍ずるゆへ
必上品なり

○享保の頃ハ町人ハ奢ん為物ハ出来利倍世ハ有そ
のハへとこ一ト世ずりのハ身のうへ
ゐし下品なるゆへ小人者と
君子豊ニして不奢小人ハ驕て
減ず天和貞享の町人ハ君子のハ
然ず町人ハ小人の中ゟ小人なるつまう

○正保度あの頃江戸中ハ武家ハ不奢ず町人ともに繊細柔
弱の数大流行ず依て男伊達と云事をつくり

伊達という事は八國の御仙臺の家士多い人の同じ氏
紫と名乗り依て有て伊達になりと云事始
所人とへとも武士の風俗剛毅質朴大小の
神祇組とて若もの組本町人と云一ツ小組合何百人
とも支を不知又自柄組吉原組と云風俗髪をも一束小柄ぞ
はをとゞめ用心しみて伊達羽織裏白大袖入を常を
白く三重なり袖口も太く丈い三里のおし
下へ下れほど能く仕立て流行す其振出人まる
糸下緒何も白く元前当時長大小を常し柄
事と死ともとも或い幕の屋敷とも
座敷の節へ入て会を持合なき時ハ掛ぬと云
今日ハ

[illegible]ん[illegible]ぎんなとゝ[illegible]ぶよし若あ
ゝらんなるとき附ハ六ツなゝて方上ゟ仕舞迄のやんぎ
ゆすれい一礼を述て三ツて七ツ頃の後ゟ山乃乃
代物の[illegible]ゟと云ふよいとして慶安今一度或ハ三度もかげ
出し先ゟ[illegible]ると云ハ印て立帰ゟ又
他人とも仲乃とも記ハ加様ゟ事と記すると新
ハ命を指ても及ぬ様ハ男道の筋と云ゟて義と
も乃前を失ひてハ[illegible]ゟ[illegible]ゟ
ゟ公ゟ事ゟハ仲乃の法度し少しも人ゟ
ゟ祝と云ゟ市てきらゟ組合乃仲乃入りする附ハ
つてを求て金銀を出し仲乃入若親兄弟の以の外乃
事として勘当とするの附ハ仲乃ゟ

不自由の人をとりて養ふ事別而厚くいたすもの
ニ付ても後堂城方ニ於御仕置被
元服をいとなむ法則を定まるゆゑ夫までの間二十年
ほどの事もつゞき市信止の後も被元服まては風の
二十六
○寛延年中女黒裏の小袖を着る若き女斗りし
○享保の始め男白茶の裏ふやる宝永ニ至スミル染元文ニ来
市絹ノ染古来ハ萌黄裏し
○寛永十六年迄ハ武家ハ格別町人百姓ニふ衣服ニ兼相し
女も町百姓の着るゆるし頃ニ心保慶安ニ近年ニキシニテ
転キ貧家の者振武衣ニまぎらし出ん為ニ
上方の市服とも市頃ハ我国に似て振すも右市頃
ねと若ゝ見物ニ山祝ニ
ゆくゝ自う世上の女子貝を奢をも有徳家の着るまゝふる事今
市頃ねのごとくらく若ゝ古の兼服をとりもうさぬ
数多くなるゝ皆不ゆかしともいふ
すてゝ明暦三年両年大火事ニ市城続ニは附
最有院殿十七年の市年日本橋ゟ
ゟ歴ゝ町人の妻振為ニ
妻女ハ力よ不及やニ市頃ニ
衣服をゝゝ奢ん
ゆゑニ馬ゟゝいゝつゝいのん世の

○寛文年中に至て小袖模様を結（ユイ）縫と唱へ地白輪子或は繻子に絞縫し小松町通石川辺と云
者の事甚美麗にて此女常に此小袖を着用せしかば是を見て倣ふ者多く小袖を全く
埋るに至る
御成の時（延宝年中代替り）彼六兵衛妻
常憲院殿上野へ御成を待受七軒町にて妻をうけ美麗を
盡せる女の切禿十人（縮緬の大振袖を
着せ其中に座す）市通の前に座をかまへて拝す是
東照宮御代より四十余年の事なれば皆目を驚かす
明暦の焼失（万治の）市ヶ谷代の時代替り其外さまざま由井
丸橋（天草乱）天草乱（承応）町人
神輿を
警固の
ため
甲冑
着用
を許
さる
（寛永
十四
年）

神輿を警固の為甲冑着用を許さる（寛永十四年）

神輿の御通行の節町人共女房を奏でも　上より停止仕方分ぬ様にとの御事にて
必事一万事に分方の分限をわすれ
こうるつこと
上さま足下の大名の奥方がや　おまつ結縫の振袖
あれ等のやうの　厳命出て則町人妻のやうに見よう
して両町を練り吟味と上石川吏師遠慮　依有屋敷
令入の小袖斗り七ツ着て行も結縫の衣装等と
新敷不知数人のやうに六兵衛といふ者
名を呼役人是を止めなき事なし是より町人
百姓男女の衣類弥の外華美奢侈御停止まて　寛永のころ

成ル丈ケ手ヲ省キ手間ヲ取ラヌ様ニ致シ度ト云フ考ヘカラ出タ物デアル

二十七

○男子本帯今般ト着ル事ハ寛文ノ頃有徳者ノ始メ下ノ町人ハ元禄ノ頃ヨリ始マリ其後ハ段々ト華美ニ流レ今ハ上下トモニ用ユル様ニナリ来ツタ

二十八

○元文ノ頃町人ノ相撲丈長ノ高上駄ヲ履キ東西ニ別レ昔ノ侍ノ様ニ一行ニ行列ヲ為シ其ノ供ノ者モ法服法下モ侍ノ衣ヲ着ケ其ノ人ヤ

正徳ノ末享保ノ始メヨリ武家ノ一生出入町人今般ノ丈ケ羽織ヲ着ル事ハ昔ノ武士ノ供ヲ学ンダモノニテ其ノ頃ハ或ハ柿ノ目ノ羽織ヲ着ル者モアリ町人多クハ半合羽ヲ着ル事ハ元文ヨリ享保ノ頃医者ヲ始メ大名ノ供ヲスル者ノ外ハ決シテ着ル事ヲ許サレズ延享ノ後ハ着スル者モ有リ

二十九

○元文ノ頃町人ノ相撲丈長ノ高上駄ヲ履キ東西ニ別レ昔ノ侍ノ様ニ一行ニ行列ヲ為シ其ノ供ノ者モ法服法下モ侍ノ衣ヲ着ケ其ノ人ヤ

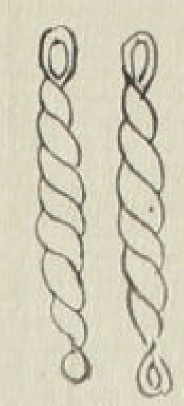
○羽織の礼服もちゐたる礼なるものにて太閤秀吉公の
大事ありの時常に小袖油のカイ巻をまとひて上を掩ひてを
見えて略してもよき物なるべしこれ薬人皆常の衣服のごとく
にもちて小袖のほころびをもかけざる容儀の時ゐぬきて逢ふ
是をえとす然しいえどもなるべし

○羽織天正のころ丈短かく天和貞享のころまでさまの
丈相應よくて着る元禄のころ羽織の丈甚長くして
はさる京の人多く浪在元禄のころ三ツ室
四室の吹き客なるしい般若昌世界よりおこりて
今程をまふけ若き人ほとんど悪事にいたりて今も絶
ぬ山まもあり悪事ともいえども銀座客ともいふと

とてなりて世上の人皆ことごとくかの銀座をまねて形
ものの小袖永くかくと手羽織みじかく袖ゆたかに
ふり羽織ゐても短く小袖丈長くる皆
ころ羽織ゐけ元禄に及て中今多くは
豊後極とふよふり流行りて此一流る羽織永く元文ふ
此風世上ともに先ゐうちもくは一流をそのふ若き礼い先ゐ
くもう後ふ学ばな人も羽織長くる

○九 紋い元来ゐも切ことにて十徳の器服ゐ天和まで
ふらし貞享ふ手ふら唐く元禄まで用ゐ宝永ふ手
杜丹ゐけ正徳ふ後半ゐ後半桜ぼんぼりけ

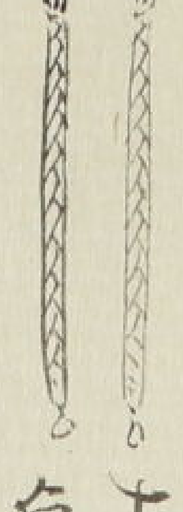
享保末より紐太く少し永くなり元文頃は紐黒重よりして太り
より右へかけ付尻紐もあり又出しはじめて常の下へかけるもあり
みなさしこれは市村羽左衛門懸元に流行出てより太くなりふとの組
たり紐と縄のようなるにて丹かけ手より手先世上
寄ることなるべし寛保三年より世上にて拾ふ延享年にいたりて
糸屋にて作りて店へ出しあり



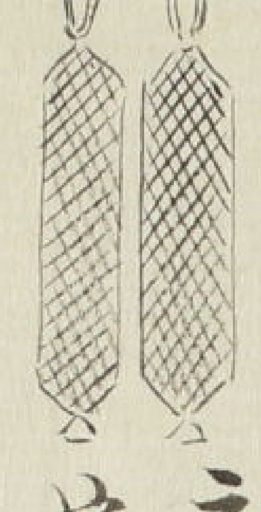
如此流行出つ八黒紐
延享の頃黄し八紫ビロウド

この後二重になる
も出る

手染黒或ハ紫にて八ッ打なし今の糸ちかく入るる見事なり
こる延享の仕出しなり若手用ゆ



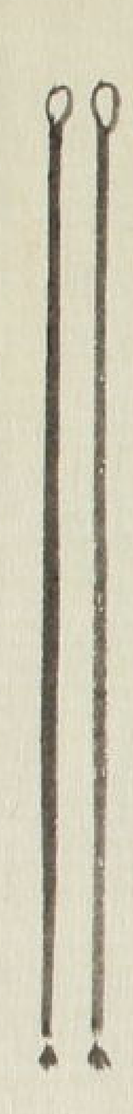
古来八ッ打細くみどりし黄ぐし茶色太くして黒或紫もあり
貞享ころし古来より少し太し



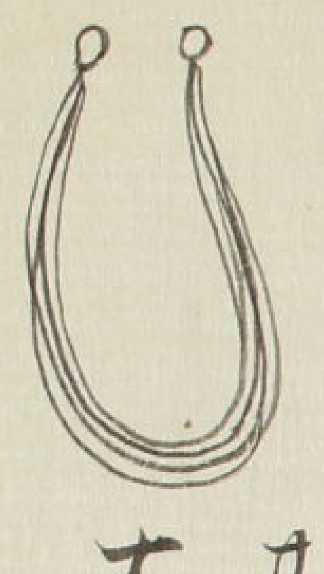
元禄ころ平打幅広く浅黄八丈は紫もあり
宝永ころハ牡丹かけ

○○

宝永ころ平打出る幅狭く短く牡丹かけもあり茶または黒し
後ち宝永より出る享保ころ太く短く先きとけるもへ糸



享保末元文頃 軽古路風の黒八ッ打
出る 長紐なり



其後黒糸にて少し細き八打を四重に有り尼より
右へかけ片紐とすることも有り見苦しかりし

○

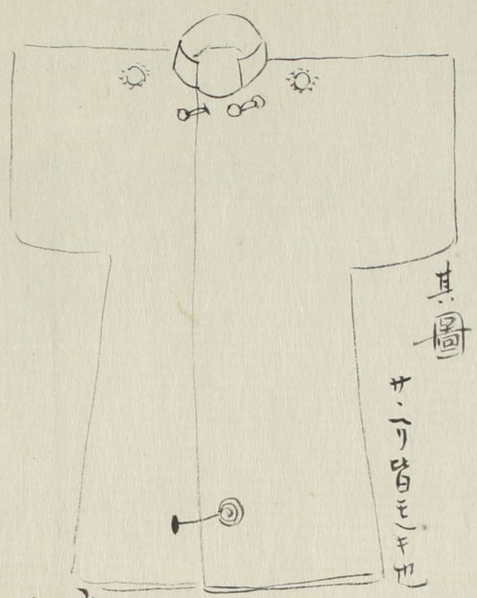
右之外紐之大谷の御殿風ありて古来より定有格別の

相遠もの〳〵個所人〳〵の
○寛延元大白の糸にて織重もの〳〵全て細とは見ゆれど
○同三年京師より細のもの
細のも所〳〵あるいづれも精
七十
○扇子用ハ元来裕と布とにて
大紋のごとき若き人〳〵吾妻小袖をつぎ〳〵まで着候
をえとつぎ〳〵ニ当るもの
七十一
羽織ハ天正年中より始ニ〳〵
一ツをえとより下帯より始れ
ものにて又礼服にても
用ゐの時乃着るものにハラリて客を対面する時ハ百
服〳〵ニ当る羽織の文合も後ニ書出〳〵ニ庶出

出板ニて
いしこと
書出ニて
入ことニ
より略ス

ニ当る下帯も上下とも礼服のごとく
仕立我ハ裕に入もして着し
やすきゆへ
▲寛政のはじめより女の児の三ツの後ニ紋のうち四ツ
ゐ襦袢の始なといふて仕立
ぢゝ〴〵のごとく結掛をとゝえ
もつて是ハ後世ハ礼服の内ニも入ニ可笑〳〵
七十二
○木綿合羽ハ云ニ及ハず
陣陽ニて
△上古羽織の
ニて着し
△上古羽織の
ニて着し
夫〳〵を事ハヒロウド、紺
てハ平り前ニ
是服屋
女なとゝ
今ハ着ものゝ
陣陽ニて
老女夫の
今ハ

一篠すゝきのすゝ大ゐ月よ云ふ事なり宝永
ころ出すごろ女本編笠被とこゝら〳〵着〳〵ゐる丸袖し
蓑衣ハ是ビロウドにて
其圖



サヽリ皆モミキ也

△今田舎の老女なとの着る合羽
これなり 昔衣の表にかく合羽
を用ゐしも宝暦の末までも
その所々安永のころやゝ廃れ
ゆきとゞけてほとんどなかく
なりしとぞ

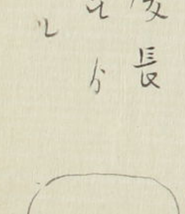
文化の今いたりてもし中立ち年の
ものゝうへ貧賤女ハ漆とあるを着る

○正徳の末まで女袖も本編合羽を着
編み雁金よりて袖ろ袖と雁
金紫はさろし元禄より始れり

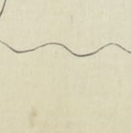
上人の娘加賀毛氈赤羅紗の下扇の始まり拙き
仮着の風と似ゐるゆへ享保のころ雁金袖合羽を仕立うて着
ゐる延享のころハ女も此風を仕ゐる故か

○正徳年中 文昭院殿御薨去 成君西天の御い
数多の上着多く一程ゝ雁の合羽を着〳〵市庭〳〵市供ゐう
皆女人合羽を着ても匂ひ 供侍人合羽の編ハ
七ツニ
○男の頭巾女の帽子吉原より
大正天の如〳〵手束安ゐうの風うつる事

上代是ヲ角頭巾ト云



シコロ



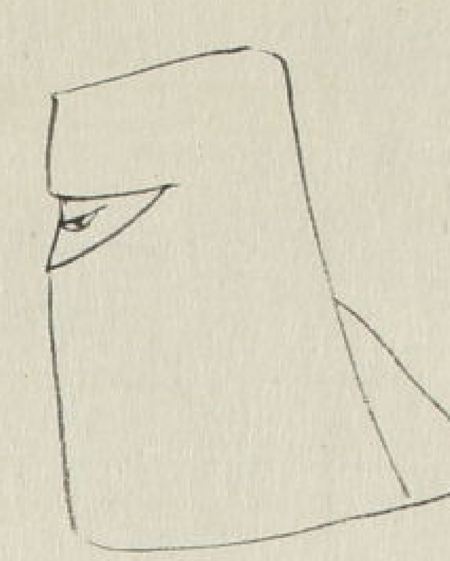
シコロナシキヌ頭巾

九 慶長のころ始ル

同シコロ付

ホクソ頭巾 以苧作之 苧屑（ヲクソ）之音 訛ヲクソ

織田信長着スルも古キ風也
元文比マテハ山家之者多是ヲ用ユ
鷹匠ナト用ユルモ有是ハやはり鳥之
田家之者ト見テカヘル指ニ仕タル物也



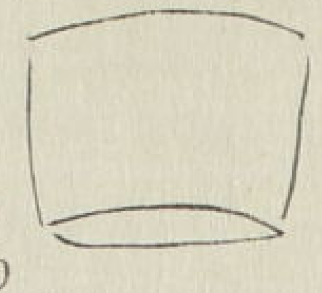
天和之比口鼻ヲ庇ニ
カクシタル頭巾ハヤル

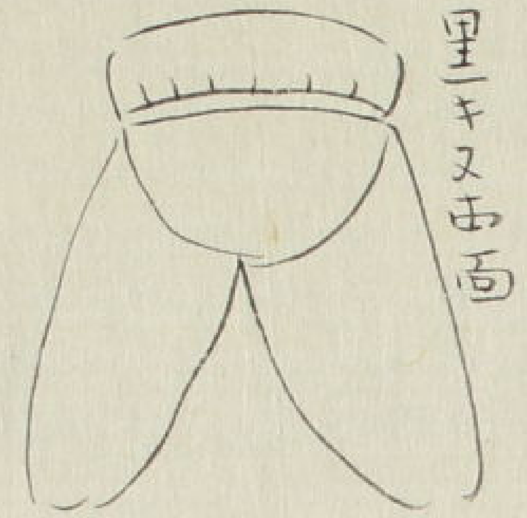
文化五年のころ
黒ハ大ちこ子のふい

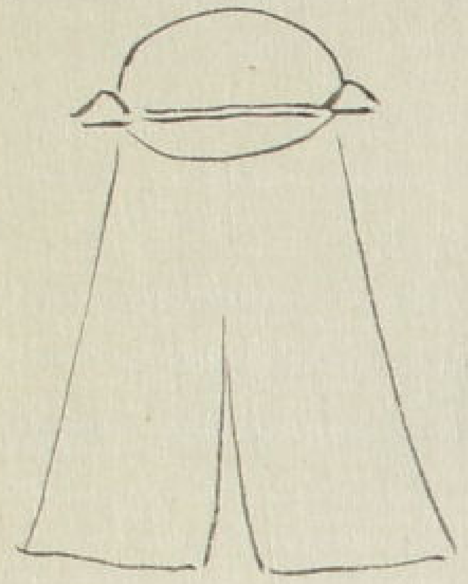
こくありとの布
きくしろ行く
故也

○其ころ 綱吉の御妾に旋付度と申ハ思謀の娘にて紀屋
方へ召出され後甲府綱豊なりて御妾ありしより
綱吉御隠世なりて旋付度其彩ハ私親ハ小山田弥四郎と
申浪人者を討しは御威光をん彼小山田弥四郎を討申度
所国々を尋ぬるも人なきを以て此外ノ体なり日本の地

天すの店どころなし依て定めし任なく古の頭巾とあつて
徘徊し菓子く止あく依之此頭巾御停止なり武家諸侯
の茶屋女た此停止し



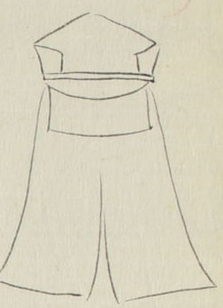




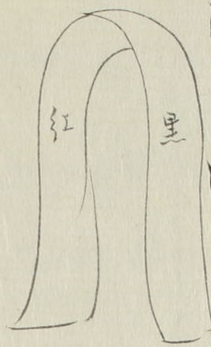
里キヌ両面

黒ちりめん 宝永の末に至るまで此頭巾を古小山田と後ハ
裏 紅絹 絶て去ころ頭巾なし

此頭巾ハ道西者或ハ出家などの諸の人まもらく
まわり享保中まで武士町人ともおもはず用ひしなり
そのハ角頭巾より丹後巳上一用ゆ
元文（えい）年中より去ころ永きことの方 紫 なとりみ
ちりめん裏紅 背の紋去ろまて見て候



寛保の頃より晨日の五別より初とりて月斗り迄
紅ゆかた
黒ちりめん表のこと
ふたへ
つまみ
又かみこは前と一帳にて月のすわとまげ
こうきゃうの一種なり
○寛保三年迄紙改前髪伊織ゆひ
抱主の者をうつくしくて吟味く用紙帯ゆひ男結頼りて
こゆひ
ゆひ止



頭もち表ちりめん小夜或は黒ちりめん紅裏
丈二尺余り幅ちりめんにて
かり

又かみこは後を綾てうしろ

○皆くゝ紙うしろの下の方ゆひ附武士の妻町人とても思ふ人へ用悪事通の芸者
などかみて後の先ゆひ法度後りの高島ゆひ
○延享二年廿年ごろく右のごとく物用も不自由
○三尺帯よりて本帯にて頭もたゞ又帯も用也
より後廃てうしろのかたより降ると云
元禄の五人も我ごとく今の腰巻
○男女共に裸形き合羽と着始り
○元文ごろより女多く着しより松坂町辺の者多し

七十四

○寛文比の元禄ていに合羽のコハゼ（ツノ）無のうち角又
ゑ手そ作り正徳ころより古落のうち丸武ハクロメ

是やくわう一ハ天明のころ
ホすこうロメセ延紙銀ちど
も見へける

○古来の駄やとよい有てよるまもとも享保のやうのかるいかしてよ
寛文時代男伊達ハ皆中ものゝさんてよ素ち
廿余年後 市代治るといへども礼世乃なきやうな雪ハ
不止治世よ寄て勇気喜へ乃ち丸て駄角をつと風も
防〳〵今〳〵陽気の為足をこゝろよく去よ伝てよ暗究
口論もまれなり

七十五

○足袋ハ古来よう有ものも寛文の比女ハ紫革をゆて

こゝろ角長一自革陣笠有級白絣ゑ白絣ゑ
ゐいた

如此て長ゝ

○古来足袋木綿をえらひ皮ハ後も

○天和ノ比ゟ木綿のうらひざ〳〵の
袋を勤土月ゟ二月ゟて
△召来中 我ゟ毎ゟ文化二丑年十四年寄陸水ゟ句
ゟ〳〵木綿足袋の上ゟし年ゟ我ゟがてき料とて十月の始ゟ
彼ゟひざ〳〵の足袋を二足ゟ給ゟ勿論のゟとゟやども変文
書ゟ娘婿ゟ人ゟも年〳〵一足ゟ給ゟ其ゟ足袋ハ傷ゟ

着く入しと上と直ニ本綿糸ニて下ゟ次第ニ
睡のごとくの縞ニ織し我ホときゝとて頭巾町ニ住屋
利左衛門小柳町池田や三九郎抔迄ハ下ゟ手ニ足
て出ス手ニ入し糸ハ綿ニ言根ゟ下ゟ言葉ニ
本綿糸ニて織ル事ニ成ル
まて出ル

○貞享ニ至て白ゟし本綿ニて女の足袋をこしらへ
○元禄ニゟ下ゟカナキン又ハ絹足袋ニて女ハ有り男ハ
皆木綿抔本綿糸ニて織し筒ニ成ル足袋ゟ下ゟ人ハ
○宝永ゟ抔抔の当足袋をハ
皆コハゼ付し三伝の比ニ廿丗ケ所ニ成ル

○享保ゟ半当ニて当足袋をハ筒と名ケクロブシ
小ニ限り股を有ル大方ニ成ル
○足袋の当ゟも不易今の当ゟ門ニ併ニ妻をさし
指の股ニ白革をつゝる事此時ゟ始ル
○享保の比　将軍吉宗公　御意被ニ付　指の股ニ
市股ニ絹のサシ足袋をハ
絹のさし足袋ゟ下ゟ人ハ
なりゟゟ平人若ハ九十ニ及ル
○袋足袋とゟふハ本綿ニ元文の事ニ
○宝永の比ゟ夏足袋と
大方ハ

△ゟり字ニ夏も足袋ニ
ハ右の比ゟ文ゟ

えつて先づ是ぞ足（アラ）脂うまて是
足よろし惟よの舌浦里くるのゆゑつてちくし又日よ
えつて足里くるうと厭してもくし市ゐ舘春の法
仮人ありまて市城へ通つて元中一冬本御足袋とそき
足袋のようなぶんやうよ又其上へ草の害足袋とそく
市城まて上の草足袋をそう本御足袋斗りて先こ肌
二足もくのもしめし

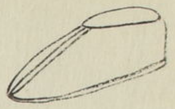
○

正徳のころまて草足袋害痘あくし小人皮（カワ）うス唐皮しちぐく
こうふて去りもやもうし筒足袋代少程すものう
皆足袋二ツ有ぶんし二ヤム草足袋廃り草すり小人より
厚くやうくし小人カワ脂足まてふつめくし多害ニヤムふ

あてこうよ害害小人ふ古くるの有ぶんし先ぶ出てめりうこと
ニヤムふ古くるの祖をみて肌あうしこうよ害ニヤム筒ふ
多仮皆足袋四百年一信のうう草保のころう右の廃り
草足袋一切のくるう和草まて、庶の皮しニヤムのころくよく
毛ばまて、あうこと上更限ちくし筒足袋ゆて十ヨ仮皆ころ
七ヨ有ぶんし古足袋走くるあうう
限安くニツもニ三年も破を通代和草足袋ち亜ちもやく
破ても心体ふふ御もう代仮ヨ有ぶんくるう

○

室永ころまて小児の花足袋かしまま本像の
足袋を要代廿四個なふし享保未ふ斗りて十六個仮なる又
享保ころ小児の皆ふ



表黒木綿物のフタの通ハ赤切て筒と
うら底ハ厚き馬の皮ハ皆の内白もめん
裏紙ハ足袋と等りト一つとそろふ
ゆへ、あり、す小児ものまゝて陸地を
略ス

天明の比

○雲古表の足袋とてゑす通ふ男ス上ろの人ハ大方皆もち乙
うら裏もさ〻らさ〻らといふもの多し男

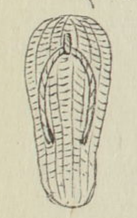
七十六

○草履ハ藁草履元ゑ〻京ゑりとていとよく
ゑりあり元禄比より当地とも真井の皮とてこゝら〻
ゑる皮多りあり下駄のそきれもこゝら〻
のごとイボラ附りハ男ハ皆ハ三谷ゑりとゑ京通ひの若男
のそきゑもこゝ皮ハ津ぬき附り流行ゑとゑ元下駄の

代三十五文ゑ文
宝保の比ゑそ
も延享ニ至て
ゑ〻よふ〻

ゑきものゝごとく武士有徳の町人のそきものゝごとく
なれハ木屐ほとの附りとりけ流行ゑ常着の人ハ皆だ

○享保より中ぬき附り有ゑとうら〻出ゑ代ゑ雨ゑ日和ゑ
るゝ多いが常着の人のそきものゝ月ゑぬやうゑ文
のごとく川崎ゑ表附りニ〻ら〻出ゑ宝保ごろハ大方ゑの
表附りをそく寸法表ゑ男ゑ皆ゑきぬビロウドを鼻緒
ゑして女ゑく雛ちもめんもち〻延享ゑ表ゑまゝ附り
多くハ布ゑりくゑいまゑのごとくゑる



京附りハ廿六銅ゑど
するハゑクの井ゑとて
つくる

京井の井ゑ表ハゑの草乳
附りとゑして紅のもこゝら〻
ゑのゑし代六銅ゑて

元禄の比相列迄ハ皆二枚表の竹ノ表ハ革のなるとう二つよりさき表ハ猪の二つざきゆて裏ハより鼻緒かゝるつくりときて八ツ折

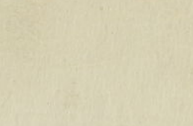
皮草履ハ革のうら皮ゆゑ皺多くよれ文ゆゑなり

○

素清草履古革ゟ出来ル中ハ革を入れるものゝ大名の玄関ハ革人の踏込入口の三ツ〳〵ぬるゟ元文のはじまでも是を嫌ふ人ハ一人ゟ無

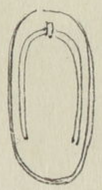
○

延享始ゟ本絎ゟ出て作る草履ハ多くハ縫ひ

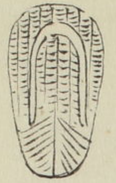


元禄比ゟ平ゟイガラ竹ノ表裏ともに革ゟ出て鼻緒太くイガラゆゑ草履ハ

皮草履ハ革のうら皮ゆゑ皺多くよれ文ゆゑなり



元文の比ゟ素清竹ノ表裏ともに革ゟ出て用中ゟ上表ハ革ニ用中ゟ上表ハ革の証ゟ



金剛竹ノとて唐の草履ゟ来れるて竹ノ地ハそう

蘭とりてつゝ中ゟムまうの帝ゟ来れ数あや唐竹ノ三ツ不用元文年中

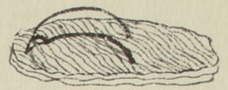
是ハ竹ノ数ゟ革の皮半分ニて作り鼻緒ハ革ニて作り両ゟくしてゟ日付ゟ

○

天明のころ**五枚**表の素清ハ

ゟきしもこと後世ゟくしもこうしい者の作ゟ

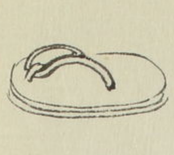
為ゟ文化のてゟ出ても世ゟ女中ゟ**五枚**をくしも



糸瓜卅り　麥ヲ元手始テ京ノ小ル〻ヘナマヒ〻ヒ白〻シテ二ツニワリテ手ニトルモノ皐法ハ白木綿持卅り又ハ風呂卅り又ハ人ノ肌ヲヨクスルト云

○有ラ〻姫卅男ノ麥俵ノ分シ

○女卅り之部　中ぬき小ざる



京ノ多クスル法雛ちりめん　ビロウド　花ヒ葉ちりめん　茶法ハ京ノ多クスル法ナリ

エキ板皮卅り　麥ノ外ニ出ル二枚ヒヨウタンガ合テ表表ニシテ外ニアルモノヒヨウタンニテ作リシ元ノ風呂ノ蓋ニテ作リ後ニ元ノ皐法クバ皐法ニ茶ハコヨリ

麥俵ノ部　川添卅り　ヨシ

寛延二ノ春より寛五救ノ麥俵卅り　皐備ヘテ　作ル　寛延三午八月　序信止

○六角ノ底ナ麥俵ヲ作リ又ハ丸ク作ルヲ大方ト云ヒヒ六角ヒ丸ヒ二ツニ三ツモアリ

○表ヒ蘭ノ細ヒヒヒ掛川ゴザノヤウニシテ皐法ヘリテビロウドヲ〻〻ヘル京師ニ大抵ヒヒヒモ皐ヒヒヒ八九寸ナル丸ヒヒヒ二重ノ〻ヒヒヒ

皐俵ノヒヒヒ瓜ヒヒヒ京卅りノ茶法トシテ茶方上ヒヒヒ足ノ掛ヒヒヒ皐ヒヒヒ女ノ用ヒヒヒ常ノ女ヒヒヒ

○右ノ外女中ノ卅りヒヒヒ多クハ雪踏ヒヒヒ麥俵ヒヒヒ女モ二ヨン三ヨンノ麥俵卅りヒヒヒ是モ私ノ女斗リ

元禄宝永の比多く湯治する
ものイカラ五て作る小児是
もの
俗ハ赤代ゆてまゞらふく

蒲がまて作る小児のさし物
ともふ栃多くて作るもの元禄宝永
比多くさ時ハ小児を
古ハ小児ニ踏ス一ささものも

○貞享比ニテハ地雪踏と云ハ桐多雪踏の事し草履の表を作り草ハ馬皮もしくハ牛の皮なるものゝ皆上方ニテハ上品の草履と唱ふ草足袋と唱ふ人ハ上品の草履を用ひ旅行の雪踏を専ら也

○寛政の初ゟ夜会抔りとて
多く白もつくて三ツ重ねの
ものを用ひて元禄宝永比
ゟ多く用ひ安永天明の
頃ゟ廃れ寛政ニ至て
ハ全く廃れ文化ニ至て
ハ七十三又々昔ニ復して

上ゟ生まて着るあつく足ともとて上雪踏とも

○又表ハ牛のさま〳〵皮もの〳〵も用ふる地合細ゝ唐縮緬ニ異法子じ革ハ寛政ゟ文化ニ至て水牛ゟ成こうもと初る事天保ニ至て全く廃れ元禄宝永ニ至て若者の脱ぎ捨ニするもの〳〵ニ成ぬ

○元禄宝永ニ至て若者の脱ぎ捨ニするもの〳〵ニ成ぬ

○寛保の末ニ至て異法白皮一ツもしくハ異法白草のごとし

○寛保の末ニ至て異法白草のごとし

○切支雪踏下駄の差や表などの
○元文より女雪踏小児雪踏作り
を初めて下ス足よりし新町
通筆雪踏上ゆるりて切まし
元より雪踏の数宝永比ゟ
三百倍又ハ弐百ハ十文文より下直
上方ゟ買ゟせて売やまし成り
多まし有ても上ル直り
○雪踏ハ元禄降町東側ニ斗り
ゟ有喜保来り新町得上ル
るも此時ゟし

○宝永のころまでハ傍の雪踏表革
表りけて皮あり白く皮ニ表皮を
里く深のまし有或ハ油ゟ
不化或ハ医者かのまし有或ハ油ゟ
ゟハつまりえ古くなれハ塗ゟ
表毛のまゝ皮と有ゟ革法ゟ
なくし

○女雪踏ハ宝永ゟて多く上方ゟ
出て下女ゟ用ふ切まし
ハりニ或ハ陸奥のまゝ

○正徳比ゟて宝永ノ末ニ有喜保ゟ
切まし出ル

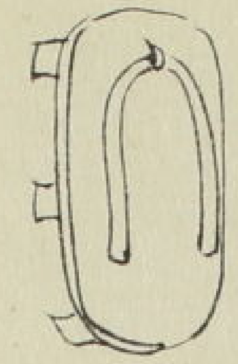
○白雪踏ハ宝永ゟて上方ゟ
出て下女ゟ用ふ切まし
ハりニ或ハ陸奥のまゝ

○正徳比ゟて宝永ノ末ニ有喜保ゟ切まし出ル

の鼻法あり元文比茶ビロウドハヤル寛保ノ裏附袢りたる
表ぜんすこ裏皮をつけたる宮錦寛文比ノ奥方の
紙さしあり享保の比より京下り表ごおり呉ゟ紫皮
多てへりと名付るを出す寛間陰地ともに女もちつまみつき
もの不通用小児にあり寛保ころ表個代に仕立る袢り
出る小児のもちあし

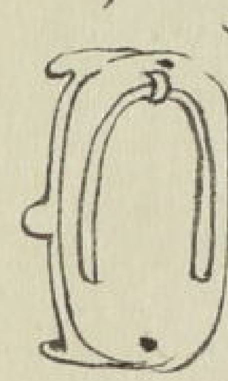
七十七
宝永比ノ京下り袢り下結あり則京袢りに下結とすなる
このあり正徳より皮鼻法の古錦の表る遠をつけ
きかり駒下結出る升ゾ是山でたりたる

表方

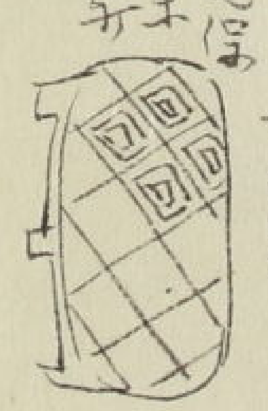


裏方

正徳末 表ミコカリ テツ段 鋲ヲ ヅケ

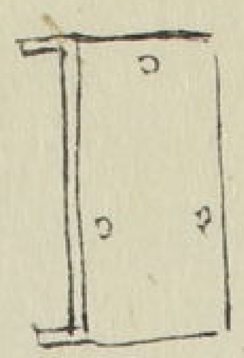


寛保の末 鋲ヅケ アミロウカリ

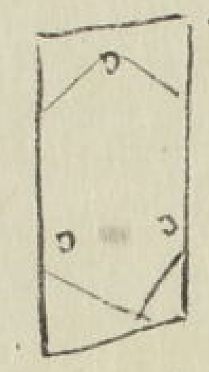


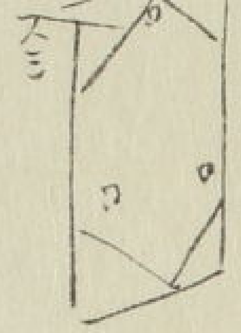
ヒロウト鼻ヲヒトナリ メン江白ナイ交モ ハキ笹ヘリ紫サヘリ

表



表

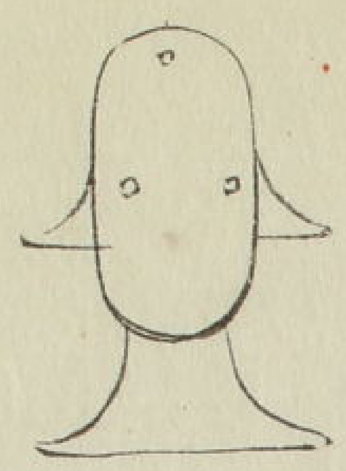




貞享より前ハこれ下結あり路次厠ホと
用ゆ板にて大ぶり作るきれんぬり上方
より下ル地を小ぬ作

元禄比ノ上方より下ル小児のこれ下結あり
表ハ地すつ條上着條あり表黒あり

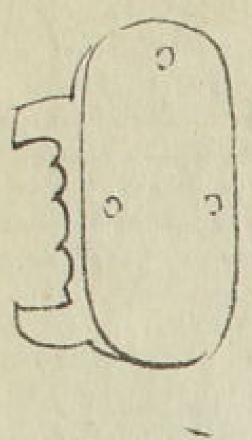
出た後て地は子多ジ
表へこれ下結作てもちも多り



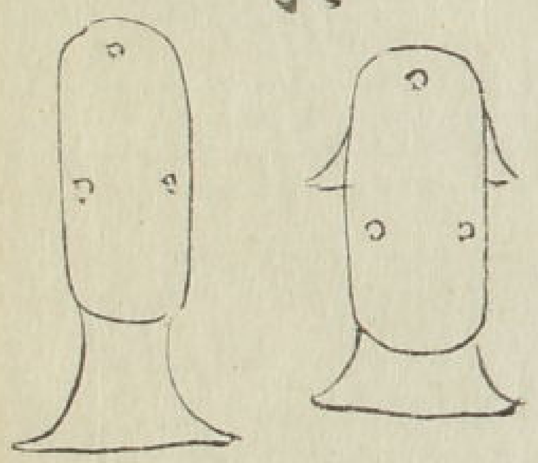
女足結表すとい條
元禄ころ用之

古来より下結といふあり東と地下結桐にてつくる山下結よりあり
山王て作ケ出ス下品なり

角モヤリ

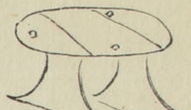


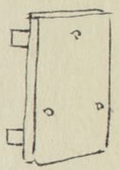
元禄の比より地をて作桐下結
田舎などにそう元下結ハ
主人のさまあし先へハ女のさまあし

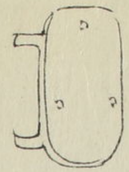


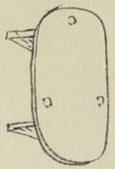
宝ヅリ

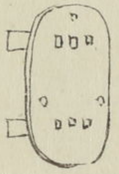
寛永の比ノ下結の遠を
よろくきいちりと
抱め比丘尼らも遠抜き
ひちし

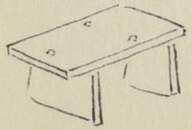












山下拵

元祿ころ先き丸の下拵出ル

享保比ゟ柳葉上画と云下拵出ル

○足袋も吉原ゟ有之ゟ貞享ころ地足袋の細工無

柳の葉ゟて作る丸下拵

享保比ゟ下ル角下拵

○享保比ゟ加賀笹上画と云下拵出ル

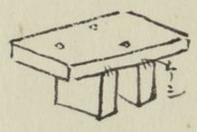
京坂ゟ下ル表底ゟ厚くして

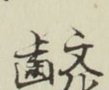
○室永比ゟ上方ゟ多く塗下駄を下ス

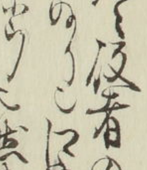
○風比都て塗下駄ニ而ゟ

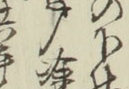
○享保ゟ下直ゟ雪下拵出ル

○後者の下拵足袋ゟ







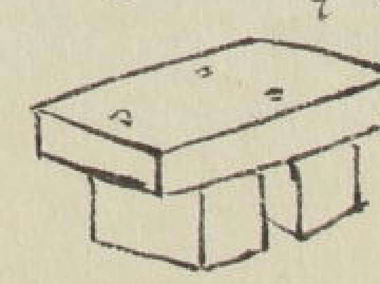


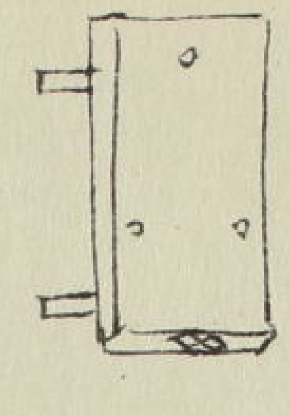
朱塗とて朱ぬりの当よりし人ハ古き床なりしがもっぱら中結足駄
を赤ぬりとして売る世上にもはやりしに正礼し寛保比ゟ止みたり
大丈三法印并弟子雅細師いつまもよろしき人の
をさこのし

△ヤハリベンガラぬりにて中と保法にてとめ保とる存ものし

寛政の比より歯を厚くしてさし歯わたしやう

○享保年中上方より挿みて作り歯斗りの木の足駄大きな字





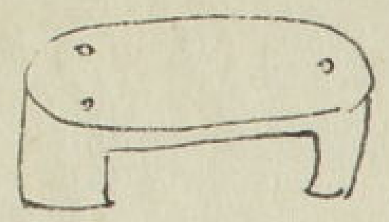
皆角　足駄の前後と
コソイと手やり
さし歯のけむ

○其比地細工表杉の木の足駄
さし歯ハケヤキし

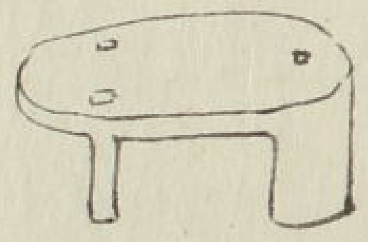
十八

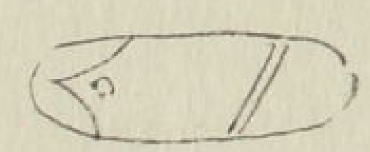
○貞享の比まてハ万事倹約なりし者も不着元禄比より奢
乱さしみえて切身卑法とろ志の其随分の者ハ上と見へし

そうじ宝永比惲との塗師のもきとのとそくとの蒔絵とて
いやむ蒔絵斗りぬり法とえきまてり正徳のそろよの多し
享保末ゟ延享頃まて人十五年已来武士出家医師弟人百姓
ゟ代出者年前着作人たいふとも古草草履法と中結足駄を
すけてあるやなハ然な者も世の中享保より次第と中国弱
して身ハ久ゆて奢なられハよく麻世なりぬめるも道理也



桐木にて作り木作り
此中結田舎ゟにて元
文ころ出る

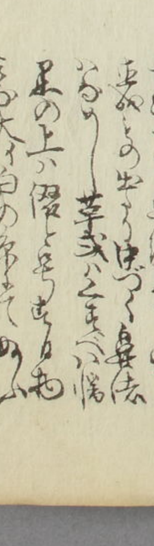




前方中太き後の方足
駄の歯入かゟ下あ引
用しよのわし寛保
比ゟ出る

但ぬりぬりとの
かうわやしまする

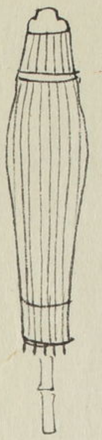
○男女塗中結足駄とも寛延三年八月
御停止

○元文比焼桐をぬう人体をきる小法足ゲたを基うて
伽羅のごとく上人いわ
○正徳の比な後の町越後や大小法をこう石紛失なき用
ゐるに長一尺二寸余横五寸位なるべきぬし
小法足袋の異法にて縄となんすがるかたを
本体にてうたてきう後をとる元禄もつこうとやう
皮を用ゐ裏皮比べで縄とよし
○宝永まて元禄の異法なるを
元禄比な下り草鼻法ちくと上下ありて上ハ七分下ハ六分
位すなわちもちくんか小田原ところ鼻高にて等
中陰地ふくまるに永雨之
ぞも足袋をもこうと皮いなくとも
でいちくんかまれなり
○宝永の比草細工い異法をちつくてゐうし(てゐうし)ほとて他し(ほとと)
鼻上下にて二分ほどもう高保なる地にて此切有異法をつくる
こと武士少者の細工或ハ町或ハ雪踏やう他り出元文
比鼻ちくと紙にて例をこしらへて表皮中に貴し後ハ
人知て不買
○寛保元ゝ前緒の部

芦縄一ちう
糸にてをこしらへ
元文の末ゝ寛保ゝ芦を
○文化の始ゝ芦表おうう
高下ちの出ゝ異法化多くのこる
表ゝの出ゝ中つく異法
なり芦表ハこまくハ偏
果の上ハ個よりもち毛
こる大小白の糸にて
き足領ゐ位

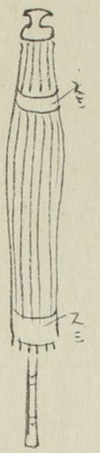
○蛇の目傘は元文寛保の頃より宝永の初めより享保の頃まで専ら用ひ
然ども傘ところどころ寛保元文の頃より用ひ始めしとも不及挽と
切ぬきして蛇の目をうきとしたる由へ不動

廿一

○傘は古来より有ところ〳〵天和のころまでは竹を柄とし傘を
用ゐ大黒屋の誂傘(ツコボ)と云は名代し貞享の比より地と仕立
上品なり



下り傘は唐紙にて細工ぶとくし張ときは
糸紫糸なり竹ともに削り丸き判り



下り女傘おしぼめ糸紫糸なり
落花ろうそくにて陀目のやう仕立

貞享より地のかこま傘まやうし天上
青どさまで細りてうとな糸

紫柄上々

元禄の比は陀の目傘おしぼめ上青どさ糸のさ
存の青どさ惣糸まぬいとし三通り口々元
青どさ 代金小朱位

○女傘は口々のと袴ぐるみもうぞ五色の糸三筋ぬひ普通の
もの〳〵ころ〳〵まもる足上傘の
○元禄の比より次傘は下り傘のごとくまして骨のこぶさよく似り
かこち傘は上まぬ糸惣糸まぐるい赤糸陀の目もと
うといとう

○享保の比紀州若山傘下ル恒くこぶるまして高蝙蝠骨
のさし形よろしきまり 袋箱入れ 司ど傘も

○元文の比、傘の風まさりやとて巧者の上る出
とうるぬきとして下妻要
○地まても白生骨こがさいと花奢まして將れ来る——亜流
六七年ほどし拾ぬ
○具房卿の千傘出れ是ろうそめるが——従四位と上り
傘まて卒人不用とのし不和ハふぢ乃——白生
○蛇の目の内紋を切りぬ——事保来より始れ青土佐存く
生れ事もし比ハ始れ
○小児の傘も古来ハ——是テンガウし手習ハ元禄比
より有徳者の子供ぞろさまざまの事保の比より三四年
もうの小児もおゝ傘をさし世智年定て可考

○日傘ハ古来より有とハ小児乃傘も天和比ハ下れ地とても
作れ五色の彩色三寸ほどの青紙のハあつくるり蓋紙
ほて一名を傘ともいふ道春夫人もまた僧医者のさゞび
上方ほてハ花ともいふ

△日傘ハ婦人小児ハ晴きり雨のときこのみを厭ハし僧医の
白ぐんハ晴乃ときも用ても可るしとものを

天和比ハ下れ
日傘

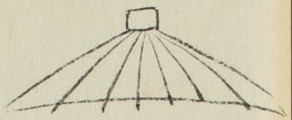
○寛保の比よりまた日傘ハ青紙張りこ又小児山王八幡
明神天王等の糸孔こ子供ハ日傘ハ寛保の一名ハ

他人さしてさゝせ柄長一のさゝい故又いきを
をはり用ゐ給ひすくさゝをつくる　小傘凡そ参拾本
あり

○大人番傘の日傘寛延三年午八月別らキヒシク作る　小児半用ねさ二寸
日傘ニ。

向ふ二寸延ル

○奥向傘ハ常ニ御納戸の傘用ゐ
少将已上用ゐ三ツ先ハ紙ニて持ツ
十万石已上の格ニ



○大黒傘ハ二寸ニて柄の長
ニ三寸ニ造る有度故のこと
小ニいるも大丈夫ニ代ル故ニ
少ク下ル

情中笠ニて被ル時ハ油入ル
故ニ油ハ付ル

○吉兵傘ハ指之と長ニ造ル元禄
ニ傘結構ニ三ツ骨ニ造ル
彼レ又吉兵ニ本骨の代ニ定紋を
不用成故ニ医者斗リ用ゐ
○
八十二
蓑ハ吉兵ニ有之ニ雨ニ田蓑の傘と称ス又大名
蓑名あり三ツ折ハ陳中ハ蓑を用ゐ
を中ニ折ル表糸のアミを付ル風除ニ着てこのも吹ちらし
ニ
慶応紀元三月十七日　毎事有川氏　牛渕ニ蓑市右衛門

有しとし

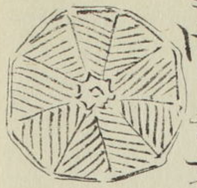
八十三
○慶長の比なも梱油令有ありし
古来ハ九令有の若梱油とも元九令有ハ蓑の略なり

○赤令有青康キヌ梱油ナド 寛永比ノ出ル

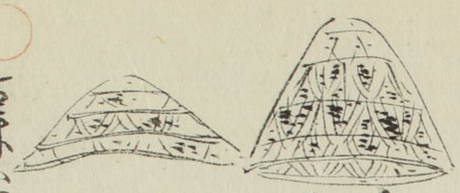
○寛永の比より梱油の蓑と小紋を染梱油とり出ル

○寛保ニ帳中令有として厚ク畳まて小紋を染梱油とり
細にかさして帳ニ入ル

八十四
○男笠の事 笠をえらひたまふ 笠ぬ 笠 古風なり
テン中ト云菱ハ笠ノ名ト用ユ



○柾笠 古来ヨリ有和列大笠ハ入山ノ時ニ着
うむりて古来より有 雨笠 日笠 雨用ユ



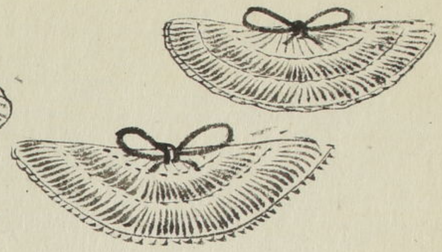
延宝の比より地ニて作れる
をさゝ笠 中ニ有 日笠ニ用ユ

後大笠ともいふ
ヨリ三尺巾ノ事
まゝ有笠

○古来ハ男女ともに編笠を冠りよう
寛文ノ余ヨリ延宝天和ノ
上方ヨリ笠あつてそとより平笠を
うばゝる

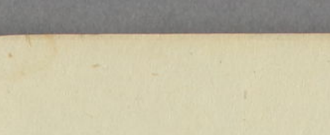
○享保年中如此笠とつゝら笠ハの上を
覆のやうなるものにて形くとカバ
ネてメむすびてくゝりそのさの口より結ふ
大笠ニ用ユ

○百里法りの陳笠 伝云の御作
不知 草具笠ニ着ル 是ヲ冠ル
雑兵の具ニ法世ニ成て後武家
の出来ル事 享保中ノ町人四季
うるはしき事もなく享保年中
よりいろは組の火消町ノ役ニ
伝ヲ人足小者ホト地ニて
細代ニ得て法ニ
隙なて出

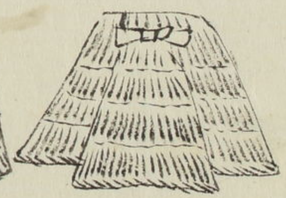


五衣ハ是ともゝ女の禮服なり
もと表ハ濃キの紫ニ裏ハ薄キの紫ニ
てともゝ一文字とよぶ延喜の
ころまでいぬさ袿ともいへり

天和比ゟ武士袴ニ着
ともゝ用ひ級々一倭着
古来ハ一文字ともゝ号
ゟ袴ニ着ル事ハ寛保年
九年ゟ定ル医原武士
ともゝ所々ハ有ル用ニ文ハ
引通ニたりもゝ
故ニゟ唯ようふともゝ袴ニ
ていふ〳〵ハ左ニ注ス



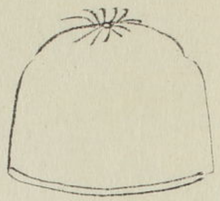
延喜の比ゟ袴ハ袖と着ニ
もゝ〳〵ニ着てともゝ武士ハ着ル事
のごとくニ男ハ用ゐもゝ

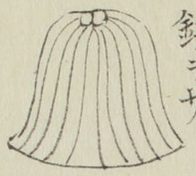


男ハいぬさの袴
着ルもゝ男伊達用ゐ
平人ハ好方ゟ
着ともゝ

小袖ハ元ハウヘキ着
用ゐ〳〵のお供ニも
着ゟ奴ハかりもゝ
ありし

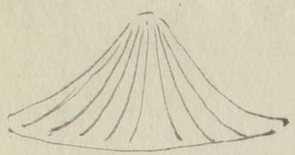
上衣ゟ出テ二中ニ云袋ニ
ゟもまれ自然ニ下ゟ女ニもゝ
元禄まて女ハ袴ニ用ニおり
あご紐ニて口ともゝ
る〳〵武士ハ寛永ゟ有シ





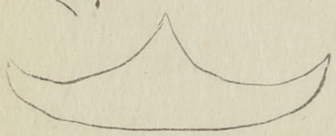
鋏ヲサ

貞享の比ゟ二度袴ニ
鼻ともゝ〳〵ふうくし
享保のすゑゟ前ニ
道中ニ袋ニ定ル

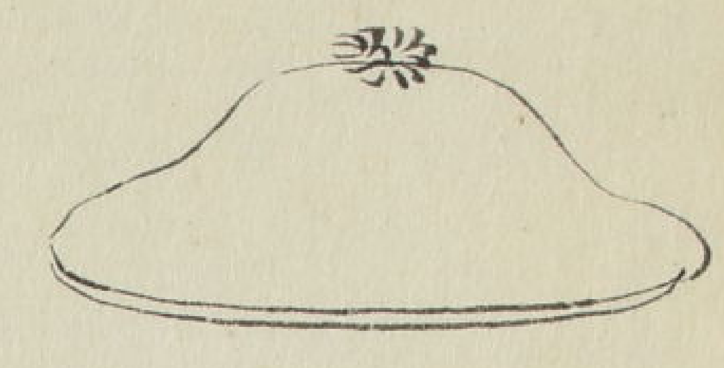


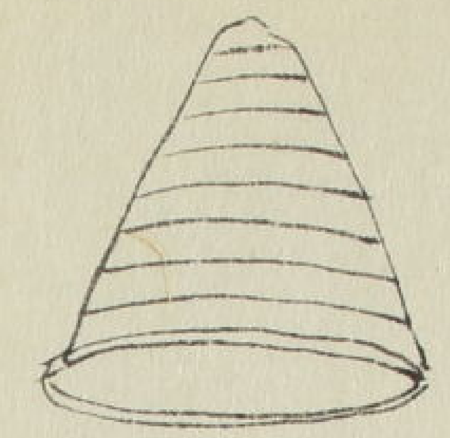
慶安元年ゟ徒士ハ袴ニ
紙ニ法ニ〳〵て
上ニ乗ル事ハ
不許ゟ事

元文元年ゟ徒士ハ袴ニ
平人のゟともゝのごとく
面ゟてきれいニ
寺シツ或ハ
月代ニ寺ゟ細代の
ごとく法ニてともゝ



細代ともゝ
ゟ袴ニ着ル
ゟ事ニ
ともゝ
ともゝ

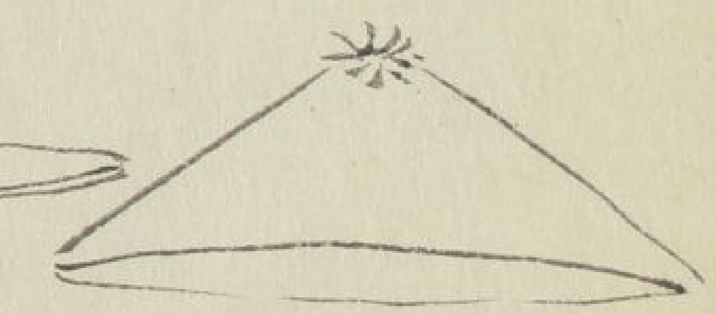


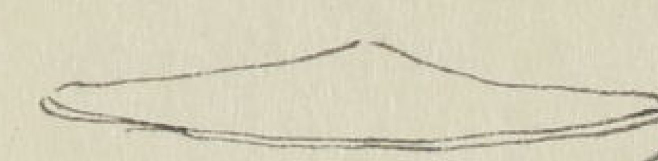


天和の比より加賀笠大ニ流行女の
かぶりしもの也 昔ハ竹にて作る
宝永来ゟ菅にて作り也 慶
よりも出天和比ハ内白を入レて元
禄ゟやうやう宝暦ゟ内一ハイニ
かく絹糸ぬいたれいし

ハチク竹笠バイシリと云地ニて
造れり 元文比より云ふ ヲカスト
猟人の笠にて狩笠の如く
さかるなりしより

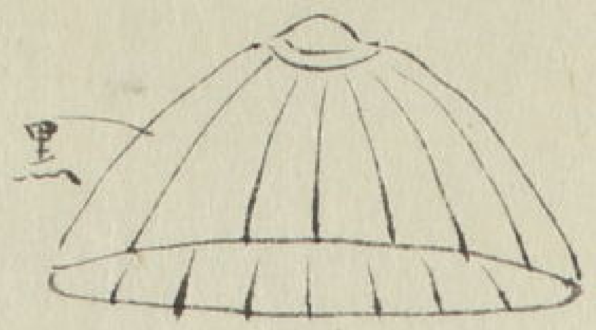
宝永ヨリ菅笠の内ニもちまでふさよせり 此随きの八ツ糸宝永より六
笠あて 菅紙随キの加賀紙も細く笠あても平常なり 正徳より
もつすり享保笠あて大ぶりなる 武家白妻のきの笠あて
出也 元文より すかし丁紙張やうやうこくの笠あてを黄黒もちゆめん
紅ちり緋ちりめんあるいは黒ビロウド 紅裏あり

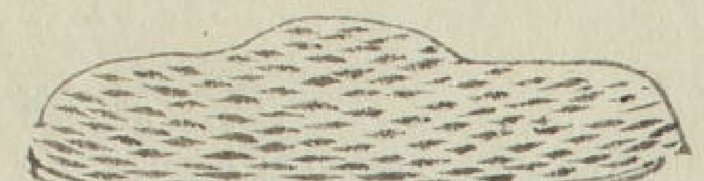




宝永より始て張ぬの菅笠
大ニ中の武士町人もすへて
かぶる 正徳比よう笠出来る
糸ぬひ付る 此次ハ麻糸
ぬひし

一文字すげ笠 旅行
馬上の為 安永の比より
文化に至て此廃りし

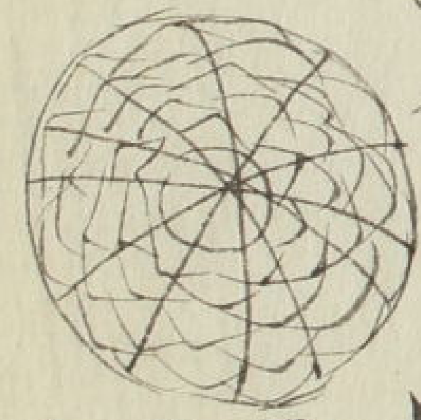




前云塗木の塗笠 寛永時代若女もかぶる 万治ヨリ来老母計り
かぶる 小児笠ハ小さくして内ニ菓牡丹杜若椿水仙ききやう杜若等の
めきり 彩色あり色さまさまあり 子供笠ハ紅裏キの紐付とし
上まて結ふ 寛永の比ろうき女のかぶりし 此ハ用ふとしまり

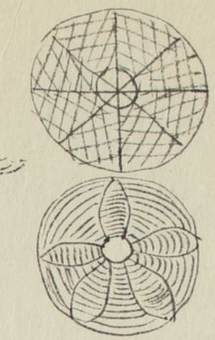
明暦比よりつら笠出る
若年女かぶる 紐紅糸なり
さよあるあり 内黒ぬりもあり
老女かぶる 元禄の比
新在家妻 御免のあさぎ
ちつくし 京のあみて笠
紐ふとし よりて外ニ見
つら笠なり

上方ハハチク竹の根ふ笠と云 所ハ
細布ここと押へとし 上の止り
正徳ヨリビロウド 享保ヨリ
黒ぬり 地よりてつくろ出来
トメ以糸皮とし

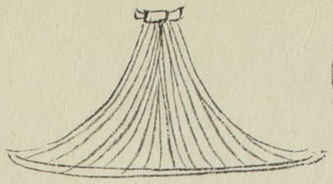


上方始 代二匁 但吉菊六分文
正徳比 代一匁
元文比 四十五文
寛保比 四十五文廿二文

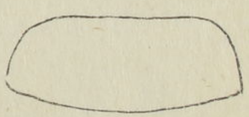
○ 笠出来 此地価一百五十銭三百文位迄ようて一見まてこるさめ笠の



元文比の形を
基とし但し笠の
径を少し小に
すること

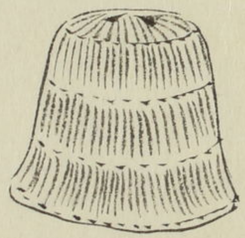


高もの笠蔵より出元文頃の比
出来りもの若干もし三寸も五寸
高ものものをもとし三枚四枚合せて作る
高ものの笠ハ間きれて笠こゑ作是ビロウジの葉しと云



菱
あすき笠底やと
つゝを半すゝか
かう活候ゟ上のハを
一文字とて基手月し
文化のころ

高保比上ものゝ
花笠ハ丹波者ニ
彩色ニて仕候ハ
ゟ笠のあつきもの



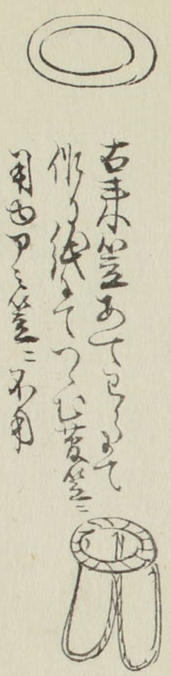
三毛傍の細笠元禄比ゟ
大ニ出て候ニ寸五分ゟ
ゟ小ニ出ず候ニ寸ゟ
蒸候の外ゟ多く
ハ出ず

○ 笠組ハ二種の比の笠違ハつゝうセこそ
ゟゝて作り候ゟ方法ニ本骨の皮ニて
掛てゟる笠比もつこゞゝて笠の輪を作て上候ゟ
笠見ゟ着ハ笠輪ニまて天和の比方
ゟゝもつこゞゝ二寸位と笠貞享ゟ元禄一把のまゝて
元双をこゞゝくゝ古ニ把ニて双ニてクワシ活用ゟゝでハ
貞享元禄ニてアゴのとハ半ばゟゝの信用ニても最ニてゟ

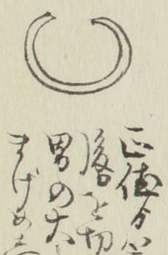
有合のものを平ゲテゐて元禄より正徳享保の笠
緒を上方ヶ下ス号をもつて草の編きを上方ヶ下ス
多く延享よりの或ハ當づゐまで作り細井とクダゐて
極く細せかよりわりも麻ゐて緒ゐ
上品多く元禄ころより宝永くらゐ笠編とゐ竟ゐて
鄙そて細くこしらへ出ス其ころ後二重緒もこしらへ
古保のヒゲ山笠編ゐ鄙そて緒隔廣くこしらへごとも
鄙多出ス古ハ元禄より上品ハ不用正徳より上品ニ
て延宝ハ申ハ下ゲ元文ゐ笠編
笠緒ハ細キ井そて多ゐ二重緒ゐて上方ヶ下ス
下品そて不用宝永より大名ハ格別平人ハ白晒笠緒を

ゐルコトハ慶長或山王の条礼ニクルハ
ハ思ちもん徐入多事多り
○笠ゐてハ古来ハ紙元禄より有合の麻切裕ゐて作ル
宝永より白晒高保ゐて黒きぬ徐入とゐる多ゐ
延享三年六月山王祭礼ニ多ク笠ハ
祈ぐり笠 有笠 品ク有り

古来笠あてらゐて
作り紙そてつくり笠ニ
用ゐる笠ニ有り

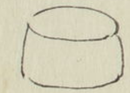


上後ニ出ル
もろこし
作ル



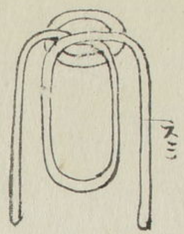
鄙田ゐて
ゐる作ル

笠編
鄙ゐて作ル

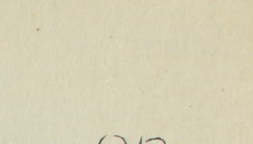


元文比笠の編を
ゐくらか細のけり
笠さうくのゆゐ
するゐうさあし
みそうさあし

○享保年中鴻師等力を免さる是ハ見光山之麓〳〵細工を業とする者ハ随中刀帯免さる也〳〵然ルニ比事と等力をとゝもに〳〵典薬のこと〳〵



享保比より笠輪の下に又笠輪の小なるを一箇所にて十文字なるを入て輪の方を前にしておごの上へかけ後へ下りる紐を又笠輪にあごをしてむすびかけ下るなり



天明比より笠輪の下に又笠輪の小なるを一箇所にて十文字なるを入て輪の方を前にしておごの上へかけ後へ下りる紐を又笠輪にあごをしてむすびかけ下るなり

覚延比より笠を差のべ〳〵有てうるさきもあり

○天和比よりハ市用達何もも等力をとゝのへ貞享より手中男

伊達をもり素町人ハても仲間入之後ハ等力をして然ル事ハ

とゞめらるゝを白栖得と云大小の神祇伊勢ともに山男伊達ハて

諸人差免ありしを中山勘ヶ由従紙を以て之御不審

有旨ハ被仰渡候ニ付御用達何も等力帯刀御免

等力の事御用達共四位等ハ

○宝暦六丙子四月六日従廣橋大納言殿

東叡山仁王門享保九甲辰三月当時

五文字 御門主御筆ニて杉木ハ

御入用ニて杉木を出ス当杉木ハ

罫 有徳院様御廟ニ石を並ル土舟山より出ス高延

方神尾若狭守始て是を伺ひ仰ニ

○ 宝暦六年丙子四月廿日仁王門出来四門を
甚服供養ありて 智出入を禁ぜられ 廿日 南無阿弥陀仏
修行をえらび 廿二年仁王門成就ス

八十八 ○ 同四年の春より始八間佛の御佛を中として後
念佛堂を建道心坊詰りの土手にて黒衣にて僧院主となり
次第に繁昌して 格式をとり 享保年中迄て書石と
なるかや

八十九 ○ 宝暦四年戌六月京師今出川法恩寺と云出家来て法人へ足を
今出法とふ法恩寺にて大字の名号を書ゆ同
五亥三月五日より四月廿日まて 南無阿弥陀佛
是を開帳ス

南無阿弥陀佛

法恩和尚の事七年目事に
委し

○ 字の大二間四方ゝ惣丈十二方 幅三方南無の二字 天井へ
りけ阿弥の二字を四面陀佛の二字をおのおのこの上よりさげ
そう

九十 ○ 同年夏諸国道連信念の者ども日参拝通四十日位や
十七八ちかくより 都合参詣人にて相止

九十一 ○ 宝暦五亥八月十五日見世開始 享保年中ニも勝
享保の末ゟ二度まで宝仁王門と云をばや奉石名代ゟ

九十二
○宝暦元年大坂中村屋座にて若女形下村屋風を防ん
せんが紫ちりめんにて帽子を製しより時の若女形こぞ
ってこれをかぶりける

吾妻のくの人是を大明(ミン)頭巾と云

九十三
○
当寛院様正香公大名

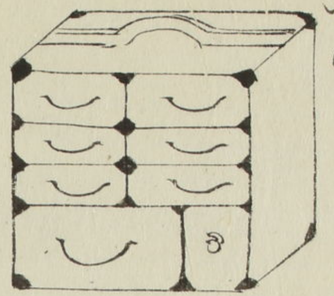
松平義落(柳沢)五万石　松平右京亮(大和郡山)十万石
松平豊後守(大和)十万石　牧野備後守(越後)七万石
文照院様正室　黒田豊前守(筑前)五十二万石
九十四
○
九十五
○
有徳院様正室　松平右京亮(越前)五万石
有馬玄蕃頭(一万石)　加納遠江守(一万石)
ほそ川の在中一紀州より正妃となり大名衆(一万石)大名衆

九十六
○
同子二月初午の日より行統六月祇園の行候まで流行
物ときこえて候云

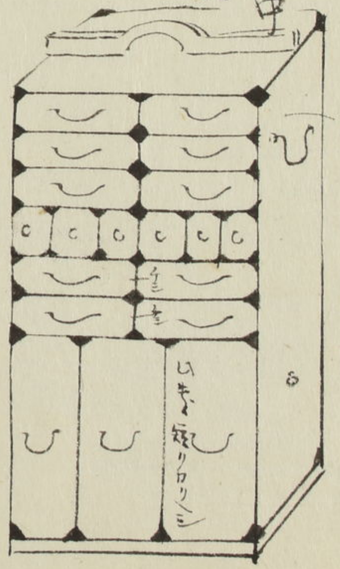
目のかい化お　そばぐるみ出ル
目出ぢん化の　ほうらくぢんの人となやまし
大師日の化ゟ　くけうまるき中ゟ
及ばでいらぬ化お　きれるいの吉と出ル
狐さーとさゝぬ化お　むこーに入道
云で作ゟ化ゟ　かわうそ
洞の化ゟ　やうな

九十七
○
奥享年中まで刻多ごこ是迄廿五年ゟ世変年ゟ世変年ゟ等
洞竹を編ぐ笠のて刻ゟし吉原ごも又ゟ女神ゟと

数いや三原さをきん刻多でこやまて名高き物ゝ和ゝる
ゝと洞くのごとう元禄年中ゟ
多のごとく



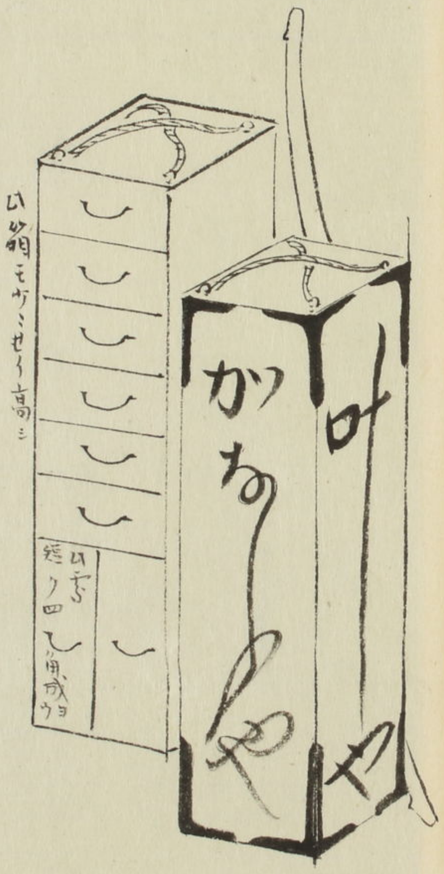
まゝう宝永年中
ゟまて世利名
下寧ゟ深く



今ケミヒリマカリ二シ

○
ゟ後元文年中神田鍋町ゟ叶屋と云刻多だこや出ル十人
余切ものをよく〳〵つゞら箱六七荷の出ゝ江戸中を賣ひろめ
ゟ付ゟ荷のキ荷の始ん

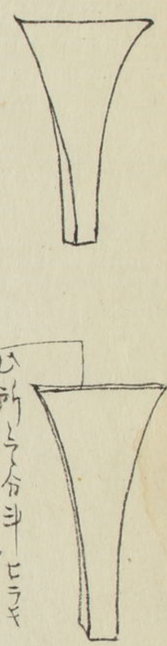
○
宝暦年中ゟまて刻多でこや屋ゟかん箱ゟ
貞享年中まてゟ後の挽荷ゟ
奉る作ゟ



元禄ゟ
外就ぶ〳〵いやりてばすかゝ
荷くさんごゝと名有車の不通に作と上品ゟ

○
延享年中ゟ豊作流とや

大キクなる



○宝暦六子五月京都ノ紙ニ墨ニ硯ニ筆ニ
のごとく一箇件入下ル代ニ百文位大ニ下ル

百

○同子八月朝日ノ菩屋町市村松之進町衆同勤係
芝居ノ勝ニ事ニ狂言ニ勤ル宝永年中板東又ヲ市
森田勘弥養子ニ成ル別板東又ヲ市ノ松之進ニ師ニ
羽左衛門芝居ノ勝ニ出勤ル何ニ成ル度毎同座相續成
ルヤウニ如ク影位ニ大キニ出ル

○同霜月顔ニ白粉ノ取所菓屋二十三軒ノ係等記ス事
と勤ルごとく菓屋ノ名ニ係ル

百一

○宝暦五亥ノ正月幕外幕二張通ス
享保年中　吉宗公御代ニ大名小名ニ申書ニ添ル
作出

百二

○宝暦五亥ノ正月ノ狂言ニ男女蘇生ノ小袖ニ下ル
羽織帷子單物ニ至ル迄ニ女中ハ立ス振ニ下ル
立ずめニ成ル事ニ女中ハ立ス振ニ下ル
ごとく同比べようニ下ル

百三

八百屋お七ニ奉行

一加賀宰相後ノ屋敷ニ山風ニ下ル
ト云ヲ九山幸助ニ八百屋ニ青物商賣ヲ
いたしニ下ル

ニ下ル進物ニ芝居ノ内幕外幕二張通ス

百

享保年中　吉宗公御代ニ大名小名ニ申書ニ添ル
事ニ公用ニ下ル
作出

百二

○宝暦五亥ノ正月ノ狂言ニ男女蘇生ノ小袖ニ下ル
羽織帷子單物ニ至ル迄ニ女中ハ立ス振ニ下ル
立ずめニ成ル事ニ女中ハ立ス振ニ下ル
ごとく同比べようニ下ル

百三

八百屋お七ニ奉行

一加賀宰相後ノ屋敷ニ山風ニ下ル
ト云ヲ九山幸助ニ八百屋ニ青物商賣ヲ
いたしニ下ル

七面大明神へふかく祈願して出世をと運ぶ佛力のちかひ
著しかりしが書肝して妙典をもふかく信じたく七面の加護
なりとて名をお七と付まゐらせしと手跡なともよし
お七ハ一躰かゝる因ありし庖瘡の跡もなかりしとぞ名ハなかりけれど先
まさ女にてハなかりしと云りお七が手跡師匠ハ吉祥寺和尚の弟子言
て云けり依之七面へ祈願乃其名をお七と額をかゝげて
天和二年ニ奉納しける昔本堂霊鷲山法花寺と云ふ一乃
文字なり土方と云ふ者を私云ふハ陽しめたりし梵鐘
と申しなりける九山より出火ありし太郎左衛門宅類焼ニ
及ぶ依之太郎左衛門ハ小石川南縁山圓乗寺へ来り類焼
急火なれハ諸道具のこらず焼失に及びけるよし其ころハ
圓乗寺も中々幸地内ニ明寮もあれハ三人も借り住来

春のころ普請も一なりかるへしと云て借宅も家も借せける
折節家主ハ是旅本山川十五里又兵衛依乎とて若き人
なりしかと始めて存しもけるがお七と密通して太郎左衛門
借りる家へハ追夜帰りて後の事其後本郷之普請成
能して太郎左衛門夫婦お七三人元の酒へ帰りお七ハよく依
が事ニてれハ家主斗りなつかしく恋しく人の云
事も耳ニいらず忙然として普しける夜ニ吉祥寺乃
門番吉三郎吉三とて大円の所業ニ井やもすれハ空説
この親の事なれバ猶ニ嘉遁してゆる町ともたら
いつの事か猶をもろい若しける者あり八百屋左衛門
女房出入しけるお七が思ひそしていかなる病気哉

あの吉三と申ものへ頼ミ火をさし候と申上奉行大きに
立腹ありて吉三も召出され申せども一言もいさぎよく申上ず万と
お七をこひそへと兎角吉三が業ゆへしたる事也罪ゆるして先
詮議大方に極りけるとて吉三人大獄屋へ入れさせ右の次
此老中へ此趣申上げる吉三井大和殿迄差上らるにお七
十五才なりしが御神も一段と可哀そうなと被仰候一意
お七が年を取りて御尋ありし上の事也為念番所聞て退く也
あるもお七親八兵衛家主共にも呼出されいかなるお七が年は
十五才なりしとや呼出されその事也何れも八兵衛始五人
御白州へ呼出お七は十五才にて申上る事奉行聞ゆゑ
せいろうにて申せども十六年来にも申し上げて翌日吉三

と呼出されいかなる吉三お七当年十五才と何とて十七才と云ふ
申上ずるや御尋ね之処吉三申上ぐ十七才に候
前しかお七元来疵之の事まで申上げ旬の事仕出し候十五才
にては悪しいたし申ましく候と上様御憐愍は七両嘗子
お七 十二歳の年まで 類付無之見と御覧に入れてはやら
奉行聞て 類とは無之 此通 天和二年十二才書とあり
夫より貞享二年までかぞふれば十七才に当り奉行も呆れはて
されども是非も及ばずして右之通り被仰付かれば御定の
事も不得止右に不及是非御法の通り手伝において
吉三は遠島に及ぶ

山田佐之助は正徳年中まで　存命

高泉寺の位牌に天和三三月廿九日と有

○おセが仮不丸の内対又八生水手伴高てらゝめて
設しる役者嵐喜代三 若女形 山喜代三 役
(図)(小)をかしさ役をかゝしおくしお七が役いろ〳〵
町奉行不の品性と奉々七大罪と斗うて外之助る

百四
○
今城金八手地之深草と
箱を焼有るし狼藉金円
志祢まても松脂をかけ
とろ〳〵こぬ入しい狼流
る

百五
○
恵仁の乳吉水安養る焼
鳥も九山東〳〵入れう東山
ふもとうて建之

○恵をふく初て蒙花るう自就(ケンギより)建業の福市とう
いつのころう検校と仮ふこ後勾当と名員と云そう

百六
○禅ち乃川の乳三春大吉
宝暦五亥三月大坂川口浅ノ
出役当地年他出廻私又八海
石浅ら役い大小ニ名仮一石ニ
一川内ゆて荷の船横ゆち勿論
乗ゆ私八三九出二ヶ半
一荷船ニ空私出入ニ
亥三月江戸町奉行所
大坂

百七
○
仮不丸の内対又八生水手伴高てらゝめて
設しる役者嵐喜代三 若女形 山喜代三 役
(図)(小)をかしさ役をかゝしおくしお七が役いろ〳〵
町奉行不の品性と奉々七大罪と斗うて外之助る

百八
○
今城金八手地之深草と
箱を焼有るし狼藉金円
志祢まても松脂をかけ
とろ〳〵こぬ入しい狼流
る

百九
○
恵仁の乳吉水安養る焼
鳥も九山東〳〵入れう東山
ふもとうて建之

○恵をふく初て蒙花るう自就(ケンギより)建業の福市とう
いつのころう検校と仮ふこ後勾当と名員と云そう

百十
○禅ち乃川の乳三春大吉
宝暦五亥三月大坂川口浅ノ
出役当地年他出廻私又八海
石浅ら役い大小ニ名仮一石ニ
一川内ゆて荷の船横ゆち勿論
乗ゆ私八三九出二ヶ半
一荷船ニ空私出入ニ
亥三月江戸町奉行所
大坂

江戸町々今ハ名のミ有て御城年廻ニ相当る人慶長の比
○軍書講釈もハやらず赤松法印と云る人東照宮の御ために太平記の講釈を初〳〵しとぞ
町講釈の始ハ清玄ニつゞいて大勢ハ出ず清玄ハ出ても二度と来ず元和の末ニ
不思議しが基となりて人を集メ
○ときに赤松法印と云 太平記を講ぜしと云
○清玄ニつゞいて京師の人名ハ不知 大勢ハ出ず清玄ハ出ても二度と来ず元和の末ニ
○ときに赤松法印と云 太平記を講ぜしと云
○清玄ニつゞいて京師の人名ハ不知 大勢ハ出ず清玄ハ出ても二度と来ず元和の末ニ

○風呂屋の始 御入国の始方 浦元隆寺門前善信の宿中今の堂建場尺余の所〳〵又内の
の堂建場尺余の所〳〵又内の 建と云 水茶屋と云ひさぐ人あり

勤番の武家方江都在留の始ハ日〳〵多くつゞひ来り
又ハ各の内の妻なれハ長屋の住居の苦をとゝのへん
五人三人打つれて彼茶屋〳〵来り酒肴を調てうちの
ゝれ打興じ酒とりしまひて彼茶屋〳〵比丘尼ハ
さだて引揚ありふまする場ありさまざまの云いひなし
ありと云ことおいて彼茶屋ニ風呂を
立諸人と入をりふしハ妻をもつれ出来一統よ
俗ハして夫より揚屋迄多く風呂屋出来ると云

○慶長の比ハ里元京の浪人共と陳幕を持
ありさま侍の体ハ一向ニ俗ニつけ百姓の姿を装て腰ニハ
足ハ袋袴の長股簑ニ笠ニ草履ニ甚だ異形のそゝろ

来報の床宿初めて是も幕を張て治ち其比をを二文利
とゝのも上総房の盤法多く出れ里人の涙人のふ
なり老手にあづと図へ引籠
百十一 先ず上総房州今ようゝとそ
世を毒婦悪婦の評判更に雲仙化
廓無が著た所ゝ廓無特のゝだ 剣法早業
悪く逃ゝまゝ二雲城後ゝ早ゝゝ出雲ゝ撃が
花ゝ付ゝ手玉お依評判の着物と一思ゝ
廓無馬上ゝて、悪雲ゝ取ゝゝ公ゝゝて洲
書を得ゝ悪名を得ゝ人気のゝ
ゝもゝ不ゝて是服ゝ天ゝゝれ命ゝゝて

百十二 大日数ゝて通ゝと武書ゝ見てゝ
二雲ゝゝ松雲ゝ松の
二のゝをゝもゝて後人文ゝ